

直江兼続漢詩校釈

* 島 森 哲 男

凡例

本稿は戦国時代の武将直江兼続（一五六〇～一六三七）の現在伝わっている漢詩二十三首の校定・注釈・現代語訳であり、余説を付した。

○底本について

直江兼続の漢詩は、私の知るところ、現在二十三首及び「花に背いて帰る」の七言二句が残っているが、武田信玄や伊達政宗の漢詩と異なり、詩集としてまとまった形をとっておらず、自筆の色紙や短冊、書幅、さらに自筆は残っていないが伝写して残っているものなどがばらばらに伝わっているという状況である。本来は見られる限りのものを逐一確認しながら底本を作っていくべきだが、今のところ個人の作業としてそれは困難なので、本稿では次の方針で一首ごとに底本を選んでいくこととした。

(一) 直江兼続自筆のものが写真や図版として見られるものについてはそれに拠ることとし、現物の所在や図版の出所を明示した。直接、所蔵者のところへ赴き確認すれば、更にもっと多くの作品について現物に基づく底本づくりができるはずだが、今はそれが困難なので、書籍・図録やネット上のサイト等を通じて現物が確認できるものに限った。

(二) 図版などによって直接見ることのできない作品については、従来、活字となつて兼続の漢詩についてまとめて言及されている文献に基づいて一首一首について底本を定める。従来、兼続の漢詩について総括的に言及されている文献として次の四種がある。

① 木村徳衛『直江兼続伝』（平成二十年、慧文社。初版は昭和十九年、私

家版）（以下「木村本」と略記する）。

② 渡辺三省『直江兼続とその時代』（昭和五十五年、野島出版）（以下「渡辺本」と略記する）。

③ 遠藤綺一郎等『直江兼続伝』（平成二十年、酸漿出版。初版は平成元年、米沢信用金庫）（以下「遠藤本」と略記する）。

④ 野村研三『直江兼続の漢詩 花に背いて帰る』（平成二十年、米沢御堀端史蹟保存会）。

以上四種のうち、十二首のみの選訳である④を除いて、多くの漢詩を収める①から③のうちから選んで、底本を定める。その際、優先順位を③①②とする。③を優先したのは注釈が一番確かで信用度が高いことと一般に入手しやすいことからである。

なお底本の活字化にあたっては旧字体は一部を除いて基本的に常用漢字に改めた。また「悠悠」などの踊り字は、原文がそうであっても、すべて「悠悠」のように同じ漢字を並べる表記に改めた。それが漢詩の本来のスタイルである。

○書下し文について

漢詩の原文の下に書き下し文を加えた。先行の諸書に見える訓み方を改めた箇所もままあるが、それは注釈者の判断によるものである。詳しくは注釈の中で記した。

○詩の形式・底本・作詩年次等について

次の各記号を使ってそれぞれ記した。

▽詩の形式、押韻。なお兼統の漢詩は二十三首すべて七言絶句である。

□底本の説明。上記「底本について」の方針に基づき、底本を明示。

△校異。上記「底本について」に挙げた遠藤本、木村本、渡辺本、その他の間の校異。

●作詩年次。明確なものは年次を記し、それ以外は未詳とした。

○注釈について

直江兼統がそれぞれの詩を作るに際して、その言葉が先行のどのような詩や文献に由来するかを確認するために、兼統が愛読していたと思われる『文選』『三体詩』『聯珠詩格』等の書をはじめ、唐・宋の詩人たちの詩集を調べ、言葉のルーツをたどる手掛かりとした。それを通じて直江兼統の漢詩づくりの特徴が見えてくるはずである。〔『文選』は兼統が詩を学ぶ上で重視した書物で、直江版『文選』の出版によってもその重視愛好の度合いが想像できる。『三体詩』は言うまでもなく作詩の上で当時入門書的な役割を果たしたポピュラーな書物で、五山の僧たちによる「抄物」も多い。『聯珠詩格』も作詩のための教科書的な書物で、兼統が朝鮮の役の際に請来した朝鮮古活字本のなかにも『精選唐宋千家聯珠詩格』二十卷十冊があり、現在市立米沢図書館に残されている。〕

なお従来からの注釈にはなお不十分どころ、不正確な箇所が見られるところから、できるだけ正しい理解ができるように従来からの誤りを正しながら注釈を施した。

○詩の配列について

直江兼統の漢詩は一部を除いてその作詩年次がほとんど不明である。したがって作詩年次順の編集は無理である。そこで武田信玄や伊達政宗の漢詩集と同様、日本の和歌集の伝統的な部立てに基づき、春・夏・秋・冬などの順で並べてみることにした。その際、作詩年次が同時で一つのまとまりをもっている亀岡文殊堂奉納詩歌に収める兼統の漢詩七首をまずひとまとめにして第一部とし、それ以外の漢詩を和歌集の部立てに倣って整理し直し、第二部とすることにした。同じ季節の詩は、内容や前後の関連からしかるべく順序

を定めた。

一 直江兼統「亀岡文殊堂奉納漢詩七首」

慶長七年（二六〇二）二月二十七日、現在の山形県東置賜郡高島町大字亀岡にある大聖寺の文殊堂に直江兼統が「雅友」二十余名を集めて漢和聯句の会を催した。そこで詠まれた漢詩和歌あわせて百首が一首ずつ短冊に記され、それを貼り合わせて冊子にしたものが寺に奉納され、現在に伝えられている。僧玄劉の序文（原漢文）によれば「今茲に慶長壬寅仲春廿七莫、豊氏兼統公、二十余員の雅友を携えて此の山に入り、唐詩倭歌一百篇を賦す。其の詩の妙なるや、其の歌の奇なるや、錦繡を裁ち金玉を磨き、寔に千年の風致なり。聚めて一冊と作す。云々」とある。各短冊は上に題が記され、中ほどに詩または歌が、そして下には作者名が記されている。このうち題はすべて兼統の実弟、大国実頼が記したもので、それぞれが詠むべき詩歌の題を出題したのである。作品及び作者名はそれぞれ作者本人の自筆とされる。

参会者のうち、漢詩を作ったものが兼統はじめ六人、三十三首。和歌を詠んだものが二十一人、六十七首（中には前田慶次もいて和歌五首を詠んでいる）。併せて二十七人、百首である。遠藤綺一郎氏によれば「藩の上位を占める大身から、兼統配下の比較的低身の者まで、上杉家中の一員として兼統と苦楽を共にした人々（それに兼統と交わりのあった僧たちも加えて）で詩歌の心得のあるほどの者は、兼統の呼びかけに応じて集まったと思われる。」（遠藤綺一郎他著『直江兼統伝』）。

関ヶ原の合戦の後、上杉家が米沢三十万石に削封されたのが慶長六年（二六〇一）八月、上杉景勝が米沢に入ったのが十一月末だから、この聯句の会が催されたのはそのわずか三か月後である。移封後の繁忙と混乱のさなか、藩の立て直しに取り組む重要な面々が郊外の古刹に集い、まる一日を費やしてこのような聯句の会という優雅な催しが開かれたのは、もちろん藩の安寧と発展を神仏に祈るためというのが第一の目的であるが、同時に藩の下々にまで、兼統公はじめ藩の方々がああして聯句の会などしておられるのだから、我々も心配することはない、と思わせるための一種のパフォーマンス

スでもあったのだろう。

この日詠まれた百首のうち兼統は漢詩七首を詠んでいる。実頼の並べた春夏秋冬等の部立てに即して、春（元日）夏（螢入簾、*実頼の部立ては夏だが、兼統の詩の内容は秋になっている）秋（菊花）冬（松雪）恋（逢恋）山家（山家）寺（暁鐘）と所要所で兼統の作品がきつちりと置かれている。後に解説するように、「暁鐘」などは参会者の笑いを誘うような内容になっており、余裕をもって、心を一つにしてこれから共にやっつていこうというメッセージが感じられる。この七首のうちの「螢入簾」と「松雪」の二首の短冊はいつの頃か剥がされて行方が分からないという。他の五首は短冊が残っている。

《01》元日

元日

楊柳其賓花主人

楊柳は其の賓 花は主人

屠蘇葶葶祝元辰

屠蘇 葶葶を挙げて 元辰を祝う

迎新送旧換桃符

新を迎え旧を送り 桃符を換う

万户千門一様春

万户千門 一様の春

▽七絶。上平声十一真韻（人・辰・春）。

●慶長七年（一六〇二）二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩 歌百首の一（其の一）。

○楊柳 やなぎ。天正七年（一五七九、二十歳）の「歳旦」の詩にも「池上糸を垂れて新柳緑に／檻前気を飛ばして早梅香」と柳と梅の取り合わせで新春の風光を描いている。○花 梅の花。○屠蘇 元日に飲む屠蘇酒。各種漢方薬を混ぜたものを酒に浸して飲み、長寿を願う万病を退散させる。隋唐時代からの習慣。王安石の「元日」に「春風暖を送りて屠蘇に入る」。○葶葶「葶」は杯（葶は仄声、杯・盃は平声）。李白「月下独

酌」に「杯を挙げて明月を邀え／影に対して三人と成る」。○元辰 元日。

韻を合わせるために元辰とした。楊師道「奉和正日臨朝應詔」に「皇猷寰宇に被り／端辰 元辰に属す」。○換桃符 新しい桃符に貼り替える。桃符は辟邪（魔除け）の力を持つ桃の木の花（ふだ）。桃の木で作った板二枚に神荼・鬱壘の二神（門神）の像を描き、門傍に貼って悪鬼を除く。王安石の「元日」に「総て新桃を把りて旧符に換う」とあるように毎年、新年を迎えるたびに貼り替える。○万户千門 王安石の「元日」に「千門万户 瞳瞳たる春」。○一様春 「一様」はおしなべて同じ。晩唐の章碣「長安春日」に「九陌の煙花一様に飛ぶ」。南宋の杜兼「寒夜」に「尋常一様窓前の月／纔に梅花有り便ち同じからず」。兼統の元和五年（一六一九、六十歳）の「浴中の作」にも「天上人間一様の秋」の句が見える。

新春を迎え、門前の柳は賓客、軒端の梅の花は主人といった風情。そろって春の光に包まれて新たな年を迎えた。杯を挙げて屠蘇酒を飲み、みなで元日を寿ぐ。新たな歳を迎え、古い年を送り、門のお札も貼り替えた。今年もこうしてすべての家々がそろって同じ春を迎えることができた。

【余説一】この詩は注釈にも指摘した通り北宋の王安石（一〇二一～一〇八六）の「元日」の詩に拠るところが多い。

元日 王安石

爆竹声中一歳除 爆竹声中 一歳除す

春風送暖入屠蘇 春風 暖を送りて 屠蘇に入る

千門万户瞳瞳春 千門万户 瞳瞳（とうとう）たる春

総把新桃換旧符 総て新桃を把（と）りて旧符に換う

○爆竹 「荆楚歲時記」正月の条に「鷄鳴きて起き、先ず庭前に爆竹し、以て山臊の悪鬼を辟く」。○一歳除 一年が終わる。大晦日となる。○瞳瞳 日が昇り夜の明けわたるさま。中唐の盧綸「臘月咸寧王の部曲娑勒の豹を擒うるを観る歌」に「山頭瞳瞳として日將に出んとす」。王安石「余寒」に「瞳瞳たる扶桑の日／出て万里の光有り」。○新桃 新しい桃符。

【余説二】野村研三氏が指摘するように（野村研三「直江兼統の漢詩 花に

背いて帰る』)、慶長六年(一六〇一)、会津から三十万石に削封されて米沢に移った上杉家にあつて、「大移住と混乱の時期にもかかわらず(八戸千門一様春)と詠むのは、家臣の侍も、職人も民百姓もすべて春の光を浴びて平穩で安らかであつてほしいという強い願いが込められており、さらに今年も新年を迎えることができの安堵の気持ちも感じられる」詩であつて、家臣や庶民を思う気持ちがうかがえる。

《02》螢入簾

螢ほたる 簾すだれに入る

涼螢度竹影横斜

涼りょう螢えい 竹たけを度わたりて 影かげ横よこ斜しや

忽入疎簾夜色加

忽たちまち疎そ簾れんに入いりて 夜や色しよく加くわわる

応是客星侵帝座

応まさに是これ客かく星せいの帝てい座ざを侵おかすなるべし

丹良一点映窓紗

丹たに良りょう一いつ点てん 窓そう紗さに映えいず

▽七絶。下平声六麻韻(斜・加・紗)。

□底本 自筆短冊紛失のため、木村本に拠る。渡辺本、遠藤本同じ。

●慶長七年(一六〇二)二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩

歌百首の一(其の二)。

○涼螢 秋の螢。宋の范成大「盤龍駅」に「涼螢復た挙らず／点綴す稲花の末」。○影横斜「影」は光。螢の光が竹林を抜けて横に斜めに飛んでくる。宋の林逋(林和靖)「山園小梅」に「疎影横斜 水清浅／暗香浮动月黄昏」。○疎簾 まばらに編んだすだれ。唐の武元衡「長安秋夜陳京昆季を懐う」に「螢の影 疎簾の外／鴻の声 暗雨の中」。また唐の韓翃「薦福寺の衡岳禪師の房に題す」(『三体詩』卷三)に「疎簾 雪を見て捲き／深戸花に映じて関す」。○夜色加 夜の空気が深まる。唐の王建「宮詞二首(其の二)」(『三体詩』卷一)に「銀燭 秋光 画屏に冷やかに／輕羅

の小扇 流螢を撲つ／玉階の夜色 涼しきこと水の如し／臥して看る 牽牛織女星」。同じく唐の杜牧「秋夕」に「天街の夜色 涼しきこと水の如く／臥して看る 牽牛織女星」。○客星侵帝座 「客星」とは常には現れず、突如空に現れる星。後漢の光武帝が、訪ねてきた故い友人の嚴光(嚴子陵)と昔の思ひ出話をして夜が更け、そのままにも寝た。夜中に嚴子陵の足が帝の腹の上に乗った。翌日天文を司る太史が慌てて奏上するには「客星が帝座(北極星)を犯して急接近しました」。すると帝が笑って言うには「夕べは故い友人の嚴子陵がわしと一緒に寝たのだ」と。『後漢書』嚴光伝に見える話。「：因りて共に偃臥す。光、足を以て帝の腹上加う。明日太史奏すらく、客星、帝座を犯すこと甚だ急なりと。帝笑いて曰く、朕が故人嚴子陵共に臥するのみと。」ここはその故事を使つて螢が部屋の中に入り込んだことを大げさに表現した。○丹良 螢の異称。『古今注』に「螢火、一名耀夜、一名景点、一名熠燿、一名丹良、：」。○窓紗 窓に張り付けた薄絹。ここは日本ゆえ障子などを指して言ったか。唐の白居易「三月三日」に「画堂三月初三日／絮は窓紗を撲ち燕は簷を払う」。宋の楊万里「初夏睡起」に「芭蕉緑を分ちて窓紗に与う」。

秋の螢が竹林を抜けて、宵闇の中、ほのかな光が横に斜めに飛んでくる。ふと簾の中に流れるように入つて来て光をともしと、周りの夜色がひととき深まる感じ。「客星が帝座を侵す」というのはこの螢のことか。ほのかな光が一点、障子に浮かび上がっている。

【余説】大国実頼の「螢入簾」の出題は「五月雨」「瞿麦」と「深更鵝河」「照射」に挟まれており、夏の季に属しているが、兼統は中国的な伝統にしたがつて、螢を秋の景物として詠んでいる。注釈に明らかかなように、有名な詩句をふんだんに使い、典拠ある故事を引用するなど、凝った詩づくり。部屋の中に入つて来た螢がぼつと灯りをともしと「夜色加わる」、あたりの夜色がひととき深まる、というのは出色の表現。それに対して「客星帝座を侵す」という句は『後漢書』嚴光伝に見える有名な故事に基づくが、螢の表現としては何やら大げさで異質。ここだけ浮いているような感じが

しないでもない。余所からやつてきた流れ星が帝座を侵すとは、暗に指すところがあるか。

《03》菊花

菊花

菊逢秋日露香奇

菊は秋日に逢うて 露香奇なり

白白紅紅華滿枝

白白紅紅 華枝に満つ

好把西施旧脂粉

好し西施が旧脂粉を把つて

淡粧濃抹上東籬

淡粧濃抹 東籬に上さん

▽七絶。上平声四支韻(奇・枝・籬)。

●慶長七年(一六〇二)二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩 歌百首の一(其の三)。

○露香 露の香り。崔魯「山路見花」(『三体詩』卷一)に「曉紅輕く拆いて露香新たなり／独り空山に立ちて春を冷笑す」。○華滿枝 枝いっぱい花をつける。杜甫「傷春」に「花開いて故枝に満つ」。文宗皇帝「宮中題」に「上林花枝に満つ」。○脂粉 紅と白粉。王維「西施」に「人を邀えて脂粉を傳す」。○淡粧濃抹 「淡粧」は薄化粧、「濃抹」は丹念な化粧。ここは白粉と紅をもつて白い菊と紅い菊とに喩える。蘇軾「飲湖上初晴後雨二首」其二に「西湖を把つて西子に比せんと欲すれば／淡粧濃抹総て相宜し」。○東籬 東のまがき。陶淵明「飲酒」其五(『文選』卷三十)に「菊を采る東籬の下／悠然として南山を見る」。

菊は秋の日差しを受けて咲き乱れ、露の香はとりわけ芳しい。花は枝に満ちて白く白くまた紅く紅く咲き乱れる。その昔、西施がおしろいや紅で淡くあるいは鮮やかに化粧した、その美しさにも見まがうこの花々を、

今日は東の籬のもとに眺めることにしよう。彼の陶淵明のように。

【余説】蘇軾と陶淵明を踏まえた詩づくり。「露香」「西施」「脂粉」「淡粧濃抹」と重ねること、菊には珍しく艶な比喩。

《04》松雪

松雪

孤松吹雪倚岩檐

孤松 雪に吹かれて 岩檐に倚る

一夜枝頭白髮添

一夜 枝頭 白髮添う

睡起朝来開箔見

睡起して 朝来 箔を開いて見れば

瀟橋詩思在蒼髯

瀟橋の詩思 蒼髯に在り

▽七絶。下平声十四塩韻(檐・添・髯)。

□底本 自筆短冊紛失のため、木村本に拠る。渡辺本、遠藤本同じ。
●慶長七年(一六〇二)二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩 歌百首の一(其の四)。

○孤松 ひともの松。陶淵明「婦去来兮辞」に「孤松を撫して盤桓す」。また「四時詩」に「冬嶺 孤松秀つ」。張説「遥同蔡起居偃松篇」に「伝え道ふ孤松最も羣を出ずと」。○吹雪 雪が吹きつける。ここは下の「倚岩檐」と合わせて「孤松」を主語とし、受け身に読んでおく。○倚岩檐 「出岩檐」は巖がひさしのように張り出したところ。『佩文韻府』には「崖檐」の語は見えるが(総江「棲霞寺碑」に「崖檐峻絶、潤戸幽深」)、巖檐・岩檐の語は見えない。「倚」はよる、よりかかる。岩の張り出したところによりかかるように、へばりつくように松が生えている。○枝頭 枝のさき。元稹「元和五年…五百韻」に「小年閑ろに春を愛し／春風の意を認め得たり／…霞朝澹雲の色／霽景 詩思を牽く／漸く到る柳の枝頭／川光始め

て明媚」。○白髮添 白髪が増す。雪を白髪に喩える例としては白居易

「送兄弟回雪夜」に「灰死（ひえて）我が心の如く／雪白くして我が髪の如し」。○睡起 眠りから覚めて起き上がる。韓偓「睡起」に「睡起して墻

陰 藥欄に下り／瓦松花白く柴関を閉ず」。○朝来 あさ。「来」は時間を示す助辞。夜来、晩来などの来に同じ。以来という意味ではない。

○開箔見 簾を開いて外を見る。「箔」は簾。（簾は平声、箔は仄声。ここは二六対で箔の字を使用）。梁・何遜「夜夢故人」に「簾を開いて水の動くを覚え／竹に映じて牀の空しきを見る」。○瀟橋詩思 「瀟橋」は長安の東、瀟水にかかる橋。折柳送別の地として有名。「瀟橋の詩思」とは唐の

鄭綰の逸話に基づく言葉で、ある人が鄭綰に近頃いい詩が出来ましたかと問うたところ、答えて言うには、「詩思は瀟橋風雪の中、驢子の上に在り。此の処、何ぞ以て之を得んや（詩思などというものは瀟橋の上を風雪の中、驢馬の背に跨って渡ってこそ、浮かび上がって来るものだ。こんな朝廷

に居っては詩興など起るものではないわ）」と（『北夢瑣言』巻七）。そこから詩的感興を誘発するにふさわしい場所・状況を指して言うようになった。

○蒼髯 松の異称。「蒼髯叟」（あおひげのじいさん）とも。『高僧傳』に見える僧法潜の話。「晋の僧法潜、剡山に隠る。或るひと問う、勝友誰とか為すと。乃ち松を指さして曰く、此の蒼髯叟なりと。」

巖がひさしのように張り出したところに一本の松がへばりつくように生えている。その松に雪が吹きつけている。昨夜の雪で松の枝に雪が積もって、まるで白髪が一気に増えたような感じだ。眠りから覚めて起き上がり、朝方簾を開けて巖の松を見上げると、雪をかぶったその松に、俄然詩の感興が沸き起こってくる。

【余説】人訪うこともない山中の巖頭、寒風・寒雪の中、たった一本枝を張る孤松の姿は、兼続自身に重なるものがある。「白髪」「蒼髯」などの擬人法的表現もいっそうその感を深くする。

《05》逢恋

逢う恋

風花雪月不関情

風花雪月 情に関せず

邂逅相逢慰此生

邂逅して相逢わば 此の生を慰む

私語今宵別無事

私語 今宵 別るれば無事

共修河誓又山盟

共に修む 河誓又た山盟

▽七絶。下平声八庚韻（情・生・盟）。

●慶長七年（一六〇二）二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩歌百首の一（其の五）。

○風花雪月 四時の美しい景色。鄭谷「寄趙大諫」に「風花雪月好し／中夜便ち招延す」。蘇軾「雪後」に「風花誤り入りて春苑に開き／雪月長く望む不夜の城」。○関情 心を動かす。感情を掻き立てる。陸龜蒙「又酬襲美次韻」に「酒香りて偏に夢に入り／花落ちて又た情に関わる」。○邂逅相逢 「邂逅」は約束もなく偶然に出会うこと。詩経・鄭風「野有蔓草」に「野に蔓草有り／零露搏たり／美なる一人有り／清揚婉たり／邂逅して

相遇わば／我が願いに適わん」。○私語 愛のささやき。白居易「長恨歌」に「七月七日長生殿／夜半人無く私語の時／天に在りては願わくは比翼の鳥と作（な）り／地に在りては願わくは連理の枝と為らんと」。○今宵 雍陶「宿嘉陵駅」（『三体詩』巻二）に「今宵刀州の夢を作し難し／月色 江声 共に一樓」。○無事 何事もなかったかのようにすべてを忘れる。皇甫冉「秋日東郊作」（『三体詩』巻二）に「閑に秋水を看て心無事なり／臥して寒松の手自ら栽えしに対す」。○河誓・山盟 男女の永遠に変わらぬ愛の誓い。「海誓山盟」「河盟山誓」などともいう。宋・辛棄疾「南鄉子・贈妓」に「別淚些些（いささか）も没（な）し／海誓山盟 総て是れ餘（と

お）し」など。

あなたに逢えたらうれしくて、どんなに美しい景色を見てもうわの空。こうしてゆくりなくも出会えたふたり。それだけでも私の人生は慰められます。今宵は夜一夜ふたりで愛をささやきましょう。明日の朝、別れたならば、何事もなかったようにすべてを忘れるのです。そしてただ心の中でふたりして誓い合ひましょう。私たちの愛は河の流れのごとく永遠に、山の動かぬごとく決して変わらぬということ。

【余説】「逢う恋」という題を与えられての題詠。一夜限りの逢瀬を楽しむものの、明日の朝になればもう他人のふりをして別れなければならぬふたり。しかし心の中では永遠の愛を誓う。そんなドラマチックな場面を描いて見せたところがこの詩の魅力。戦国武将の漢詩とは思えぬ色っぽさ。兼統には別に「織女惜別」と題する詩があり(↓《16》)、内容が酷似する。「二星何ぞ恨みん 年を隔てて逢うを / 今夜床を連ねて 鬱胸を散ず / 私語未だ終らざるに 先ず涙を洒ぐ / 合歡枕下 五更の鐘」。

渡辺三省氏はその著『直江兼統とその時代』(一九八〇、野島出版)において「兼統と恋愛」なる章を設け、この「逢恋」と「織女惜別」「曉鐘」の三詩を材料に「彼が生涯胸に抱いていた恋人がいたことが察せられる」(二二二頁)と大胆に推測しておられる。文学の世界と現実の世界の距離をどのように捉えるかは人それぞれだが、現実を引きつけ過ぎると、却って文学的味わいをそぐことになる。

《06》山家

山家

盤石垂蘿避世塵

盤石 垂蘿 世塵を避く

山中旧宅独容身

山中の旧宅 ひとり身を容る

白雲深処行人少

白雲深き処 行人少

峭壁攢峯蓋四隣

峭壁 攢峯 四隣を蓋う

▽七絶。上平声十一真韻(塵・身・隣)。

●慶長七年(一六〇二)二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩歌百首の一(其の六)。

○山家 山中の家。長孫佐輔「山家」(『三体詩』卷一)に「独り山家を訪ね歎みて還た渉る」。賈島「暮過山村」(『三体詩』卷三)に「数里寒水を聞き / 山家四隣少(まれ)なり」。ちなみに『和漢朗詠集』の部立ての一つに「山家」があり、白居易の有名な「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴き / 香炉峰の雪は簾を掲げて見る」の句などが入っている。亀岡文殊堂奉納百首ではこのあたりの題は、山家、蕭寺、曉鐘、観無情、閑中灯と続いており、その中で兼統は山家と曉鐘を受け持っている。

○盤石垂蘿 「盤石」は大きく平らな石。「垂蘿」はつたかずら。秦系の「題張道士山居」(『三体詩』卷一)に「盤石垂蘿 只だ是れ家 / 頭を回らせて猶お看る五枝花」。「垂蘿」を諸家は「蘿を垂らして」と読んでおられるが、「垂蘿」二字で名詞である。○避世塵 世俗の塵埃を避ける。梁・江淹「雜體詩三十首」(《世中散言志詩》)(『文選』卷三十一)に「志を潜めて世塵を去る」。○山中旧宅 人里離れた山中のかつての住まい。戴叔倫「贈殷亮」(『三体詩』卷一)に「山中の旧宅 人の住む無し / 風塵に来往して共に白頭」。○容身 この身ひとつを置く。僧靈徹「答韋丹」(『三体詩』卷一)に「年老い心閑にして外事無し / 麻衣草坐 亦た身を容る」。○白雲深処 積霊一「僧院」に「無限の青山 行きて尽きんと欲し / 白雲深き処 老僧多し」。○白雲「はしばしば深山、また隱遁の象徴となる。杜牧「山行」(『三体詩』卷一)に「遠く寒山に登れば石径斜めなり / 白雲生ずる処人家有り」、王維「帰輞川作」に「悠然たる遠山の暮れ / 独り白雲に向って帰る」、劉長卿「尋南溪常道人隱居」(『三体詩』卷三)に「一路経行する処 / 莓苔履痕を見る / 白雲静渚に依り / 青草閑門を閉す」など。○行人少 行き交う旅人はめつたにいない。王維「送劉司直赴安西」に「三春時に雁有るも / 万里行人少(まれ)なり」。岑參「送劉判官赴碛西」に「火山五月行人少(まれ)に / 君が馬の去ること疾くして鳥の如きを見る」。また耿湋「秋日」に「古道人の行くこと少(まれ)に / 秋風禾黍を動かす」。○峭壁攢峯 「峭

「壁」は切り立った崖。「攢峯」は群がる峰々。盧同「逢鄭參遊山」（『三体詩』卷二）に「相逢うの処 草茸茸／峭壁攢峯 千万重」。○蓋四隣 あたりをおおう。王維「題崔処士林亭」（『三体詩』卷一）に「翠樹の重陰 四隣を蓋う／青苔日に厚くして自ら塵無し」。

つたかずらの茂る平らな石の上、ここで世俗の塵を避けて暮らす。山中の古びたこの家に、この身ひとつを置く。白雲深く垂れこめるこの山中には、行き交う旅人もまれで、ただ切り立った崖や群がる峰々が、四隣を蓋うばかりである。

【余説】語注に示したように『三体詩』に見える語句をふんだんに使って描いた水墨画のような世界。そこに身を置く隠遁者にわが心を重ねること、孤独な心を描くとともに、繁忙な政務の中、しばし心を濯ぐ心境をも寓する。

《07》曉鐘

曉鐘

支枕幽齋夢不成

枕を支えて 幽齋 夢成らず

疏鐘報曉太多情

疏鐘 曉を報じて 太多情

豊山霜白一声裏

豊山霜白く 一声の裏

月落烏啼三五更

月落ち烏啼いて 三五更

▽七絶。下平声八庚韻(成・情・更)。

●慶長七年(一六〇二)二月二十七日。四十三歳の作。亀岡文殊堂奉納詩 歌百首の一(其の七)。

○曉鐘 あかつきの鐘の音。岑参「和賈至早朝大明宮」(『三体詩』卷二)

に「金闕の曉鐘 万戸を開き／玉階の仙仗 千官を擁す」。賈島「三月晦日贈劉評事」(『三体詩』卷二)に「未だ曉鐘に到らずんば猶お是れ春」。○

支枕 陸游「冬夜聽雨戲作二首」其二に「檐を遶りて点滴 琴筑の如し／枕を支えて幽齋に聴きて始めて奇なり」。「支枕」一作「支枝」。○幽齋 静かな部屋。前項陸游詩参照。○疏鐘 間遠に鳴る鐘の音。王維「酬郭給事」に「禁裏の疎鐘 官舎晚れ／省中の啼鳥 吏人稀なり」。○報曉 夜明けを知らせる。王維「和賈至早朝大明宮」(『三体詩』卷二)に「絳幘の鶏人 曉籌を報ず」。李商隱「馬嵬」(『三体詩』卷二)に「復た鶏人の曉籌を報ずる無し」。○多情 感情の豊かなこと。感受性の繊細なこと。張昉

「寄人」(『三体詩』卷一)に「酷だ風月を憐れむは多情なるが為なり」。雍陶「過南隣花園」(『三体詩』卷一)に「怪しむ莫かれ 頻りに酒有る家に過るを／多情長に是れ年華を惜しむ」など。○豊山 中国古代の地理書『山海經』に見える山の名。この山に九つの鐘があり、霜が降るとそれに感応して自然に鳴るといふ。『山海經』中山經(中次十一經)に「又た東南三百里、

豊山と曰う。…九鐘有り、是れ霜を知れば鳴る」。(或いは米沢に近い飯豊山あたりをイメージするか)。○月落烏啼 張繼「楓橋夜泊」(『三体詩』卷一)に「月落ち烏啼いて霜天に満つ／江楓漁火愁眠に對す／姑蘇城外寒山寺／夜半の鐘声客船に到る」。○三五更 三更(午前零時ごろ)と五更(午前四時前後)を合わせた表現だろうが、熱さない言い方で意味がとりにくい。余説参照。

枕を支えて静かな部屋で眠れぬまま悶々としているうちに、はや夜明けが近い。ゴーン、ゴーンとまばらな五更の鐘が曉を知らせる。心はなぜかはなはだ波立つ。霜が降りると鳴ると伝える豊山の鐘が、霜白く降りた

わが宿に、ゴーンと一声響くと、月は西に沈み烏がカアと啼く。張繼さんではないが、あの鐘はさて三更か五更か。

【余説】結句の「三五更」という不思議な表現について、何故このような表現をしたのかを考えてみると、張繼の詩の「夜半の鐘声」をめぐって、これが文字通り夜半＝三更の鐘なのか、それとも曉＝五更の鐘なのかについ

て、宋代の詩話や日本の五山の詩僧たちのあいだにうるさい議論がある。兼統は大永七年（一五二七）成立の『三体詩幻雲抄』（勉誠社「抄物大系」所収天文五年（一五三六）写本の影印本あり（一九七七刊））並びにその他の『三体詩』の抄物を通じて、それらの議論を読んでいる。そのいくつかを紹介すると、

① 歐陽脩は張継の「姑蘇城外寒山寺／夜半の鐘声客船に到る」について「句は則ち佳し。其の三更の如きは是れ鐘を撞くの時ならず、三更は夜半は鐘を撞く時刻ではないと批判している。しからば何故「夜半」としたのか。

② 「五更の鐘説」愁眠熟せぬまま五更の鐘の音を聞いてしまった張継は、それでもまだ曙けやらぬ空を恨んで、これではまるで「夜半の鐘声」ではないかと怒った。これは「活話」（禪の語録などに見える、表面上の意味ではなく、話者の意図を直感的に把握すべき言葉）であって、「夜半」を文字通り捉えるべきではない。

③ 「三更の鐘説」『南史』に、齊の武帝の景陽楼に三更五更の鐘があるという記述が見え、また丘仲孚の伝記に「少くして学を好み書を読むに常に中宵の鐘の鳴るを以て限りと為す」とあるので、三更に鐘を鳴らすことはあったのだ。探してみれば実際に夜半に鐘を聞いたという詩が唐代にいくつもある（于鵠・白楽天・温庭筠など）。

④ 「妓女の偽り説、実は三更の鐘」色好みの張継は一夜、妓女と共に臥したが、妓女は他の客に奔らんとして偽って言うことには、あれも五更の鐘が鳴りました。月落ち烏啼いて霜天に満ち、夜も已に明けましたわ。漁師たちも漁をやめ、火を焚いて休んでいます、わたしもう帰らなくちゃ、と暇を乞うので帰した。妓女が帰ったあと、夜半の鐘声が聞こえてきて、まだ三更だったと気付き、張継は臍を噛んだ。

⑤ 「張継の偽り説、実は五更の鐘」張継と一夜を共にした妓女が、もう五更の鐘が鳴ったので帰りますと言ったのに対して、張継がいやあれは夜半＝三更の鐘だと偽って引き留めた。『詩経』鄭風・女曰鷄鳴のころ。

などである。わざわざ妓女を登場させるあたり、後の『素隠抄』に云う「出家ノ講ズルニハ似合ハヌゾ」という通りだが、こうした抄物のくそまじめな議論を当時の読者たちは面白がって読んでいたものと想像される。兼統のこの詩もこれらの議論を踏まえて、この鐘の音はいつたい三更なのか五更なのか、というところで「月落ち烏啼いて 三五更」と詠み、その場の仲間たちも笑いながら意味を理解したのではないか。これは抄物をみんなが読んでいるということを前提にして成り立つ、冗談半分の詩である。だから承句の「疏鐘曉を報じて 太だ多情」という表現の「多情」も、心が揺さぶられるという普通の意味と、艶なニュアンスの「多情」を両方兼ねた洒落言葉なのである。

ちなみにこの張継の「楓橋夜泊」詩をめぐる抄物の議論のあれこれに関しては、村上哲見『漢詩と日本人』（一九九四、講談社）、同『中国文学と日本十二講』（二〇一三、創文社）、堀川貴司『続五山文学研究』（二〇一五、笠間書院）等を参照。

（以上亀岡文殊堂奉納漢詩七首）

二 不編年詩

《08》歳旦 天正七年

歳旦 天正七年

冬風吹尽又迎春

冬風吹き尽きて 又た春を迎う

春色悠悠晷運長

春色悠悠として 晷の運ること長し

池上垂糸新柳緑

池上 糸を垂れて 新柳緑に

檻前飛気早梅香

檻前 気を飛ばして 早梅香る

▽七絶。下平声七陽韻（長・香）。起句踏落し？

□底本 遠藤本に拠る。木村本、渡辺本同じ。

△「迎春」、木村徳衛『直江兼續傳』に云う、「第一句は従来「迎春」と伝写せられてあるが七陽の韻なれば「迎陽」の誤写であろう」と。

●天正七年（一五七九）正月。二十歳の作。

○歳旦 元旦。○冬風 冬の風。貫休「冬末病中作」に「冬風 草木を吹き／亦た我が病根を吹く」。○吹尽 吹き尽きる。吹き止む。元稹「有酒十章」に「東風吹き尽きて南風来り／鶯声漸く渋く花摧頹す」。張紘「行路難」に「春風吹き尽きて燕初めて至り／此の時自ら為えらく君の意に称うと」。○迎春 姚合「新春」（『三体詩』卷三）に「未だ暁けざるに寒を衝いて起き／春を迎えて病を忍んで行く」。また「迎陽」という言葉は唐詩には見えないが宋詩には見える。王安石「和中甫兄春日有感」に「嬌梅雨過ぎて吹くこと爛熳／幽鳥 陽を迎えて語ること啾啾」。陸游「假日書事」に「雕檻陽を迎えて花併び発き／画梁 雨を避けて燕及び来る」。○春色 悠悠 「春色」は春の景色。謝玄暉「徐都曹に和す」（『文選』卷三十）に「春色皇州に満つ」。「悠悠」は閑適、閑暇のさま。ゆつたりしたさま。晋の木華「海の賦」（『文選』卷十二）に「永く悠悠として以て長生す」など。

○晷運 晷（ひあし）の運り。太陽の運行。晋の潘尼「三月三日洛水の作」に「晷の運ること窮已無く／時の逝くこと焉んぞ追う可けん」。宋の謝惠連「搗衣」（『文選』卷三十）に「晷の運ること倏として催すが如し」。○池上 池のほとり。張籍「感春」（『三体詩』卷一）に「遠客悠悠として病身に任す／誰が家の池上にか又た春に逢わん」。○垂糸 糸のように細く垂れる。李白「侍従宜春苑奉詔賦龍池柳色初青聽新鶯百轉歌」に「池南の柳色半は青青／縈煙嫋娜 綺城を払う／垂糸百尺 雕檻に掛り／上に好鳥有り 相和して鳴く」。○檻前 「檻」は窓辺のてすり、欄干。李山甫「方干隱居」に「溪畔 沙に印して 鶴跡多く／檻前 竹に題して 僧名有り」。

○飛氣 「飛氣」という言葉は唐宋の詩に見えないが、飛は飛散の意で、気を漂わすことであろう。梅の香りが馥郁と漂う。○早梅 早咲きの梅。唐の太宗「春池柳」に「縈雪 春岸に臨み／參差として早梅に問わる」。

さんざん吹き荒れた冬の風も止んで、今年もまた新たな春を迎えた。春

の景色はのんびりとのどかで、日足は長い。池のほとりの柳は芽吹いたばかりの柔らかな緑の枝を水面に垂れ、おぼしまの前の梅ははや咲き初めてほのかな香りを漂わせている。

【余説】二十歳の作に相応しい清新・爽快・柔軟さ。

《09》岩井信能公、見和予試毫之韵次、示詠梅之和歌一首。曰、吾祝歳旦之試類於梅者、有年于茲矣。予謂夫梅者太極仁根、而荒寒清絶也。其標格高也、其香色深也。僉曰、天下尤物也。今也按公之吟詠、其志氣堅美也。嘉賞何以加之乎。仍歩其韵末、以補拙耳。希咲擲。

岩井信能公、予が試毫の韵に和して次せられ、詠梅の和歌一首を示さる。曰く、吾れ歳旦の試類を梅に祝すること、茲に年有り。予れ謂うに夫れ梅は太極の仁根にして、荒寒の清絶なり。其の標格や高し、其の香色や深し。僉（み）な天下の尤物なりと曰う。今や公の吟詠を按ずるに、其の志氣は堅美なり。嘉賞何ぞ以て之に加えんや。仍りて其の韵末に歩し、以て拙を補うのみ。希わくは咲（わら）いて擲（す）てられよ。

○岩井信能 花ヶ前盛明編『直江兼続大辞典』（二〇〇八、新人物往来社）の記述を引用すれば、「岩井信能（いわい・のぶよし）（？～元和六（一六二〇）・十・十）備中守、民部少輔。はじめ源藏。岩井氏は岩井城（長野県中野市岩井）主であったという。永祿六年（一五六三）、信能は父満長と越後に来て上杉謙信に仕える。：天正十年（一五八二）、飯山城（長野県飯山市飯山）將となり、翌年、上杉景勝の命で修理。文祿三年（一五九四）の『文祿三年定納員数録』によると、知行定納高二九八三石七斗九升、軍役一七九人であった。慶長三年（一五九八）、景勝の会津移封に従い、宮代城（福島県福島市瀬上町宮代）六〇〇〇石の城代となる。慶長一九年の大坂冬の陣に参陣。大石綱元・安田能元とともに会津三奉行と称された。茶道の達人だったともいう。」○試毫 試筆。新年の書初め。○試類 試毫に同じ。書初め。○標格 品格。劉禹錫「令狐相公見示贈竹二十韻

仍命継和」に「堅貞 四候を貫き／標格 百卉に殊なる」。○尤物 すぐれている人、また物。劉禹錫「和楊師皋給事傷小姬英英」に「但だ是れ好花皆落ち易く／從來 尤物長生せず」。白居易「真娘墓」に「世間の尤物留連し難し／留連し難く 銷歇し易し」。○嘉賞 ほめたたえる。韓翃「送客之江甯」に「呉士の風流甚だ親しむ可し／相逢うて嘉賞すれば日応に新たなるべし」。

岩井信能公は、わたしの新年の試筆の漢詩の韻に和して、梅の和歌一首を示されました。そこに添えて云われるには、わたし(岩井信能)は毎年、新年の書初めに梅の歌を詠むこと、すでに何年にもなります、と。わたし(兼統)が思うに、そもそも梅は宇宙の仁の心の根本であり、寒く厳しい季節の中で清らかに咲くものです。その品格は高く、その香りや色は深いものがあります。だれもがみな天下に優れたものと言います。いま公が詠まれた歌を拝見するに、其の志は堅く、気品には美しさがあります。どんなに褒めても褒めきれぬものではありません。そこで御作の韻末に合わせて、先の拙作をいささか補うばかりです。願わくはご笑覧の上、お愛してください。

書窓 鶯日更遲遲

書窓 鶯(燕)日 更に遲遲

迎歳新春似旧時

迎歳 新春 旧時に似たり

我句凡桃還俗李

我が句は 凡桃 還俗李

君唸梅藥世皆知

君が梅藥を唸ずるは 世皆な知る

▽七絶。上平声四支韻(遲・時・知)。

□底本 木村本に拠る(題詞が記されているため)。

●作詩年次未詳。

○書窓 書齋の窓。また書齋。蘇軾「歐陽季默以油煙墨一丸見餉、各長寸許、戲作小詩」に「書窓に輕煤を拾い／仏帳餘韻を掃う」。○鶯日「鶯」はつばめの意だが、そのままでは意味をなさない。遠藤綺一郎氏は「閑居(鶯は燕に同じで、くつろぐ意)の日」と訳する(『直江兼統伝』)。ここ

ではその説に従っておくが、そのような用例は唐宋の詩には見出せない。あるいは後引の蘇軾の「晴窗曠日」とのつながりから「鶯日」は「曠日」の誤りかとも考えられる。曠日は道教の修養法の一つ「服日華」。太陽に向かつて深呼吸し、太陽の精気を吸い込む(『真誥』巻五に「日出ること二丈、正面に之に向い、口に死気を吐き、鼻に日精を嚙(す)う」とある)。蘇軾「柳子玉亦見和、因以送之、兼寄其兄子璋道人」に「晴窗 日を曠んで 肝腸煖かに／古殿 真に朝して 屨袖香し」。○遲遲 春の日のどかなるさま。『詩経』豳風・七月に「春日遲遲たり／繁を采ること祁祁たり」。同じく小雅・出車に「春日遲遲たり／卉木萋萋たり」。○似旧時 昔と変わらない。白居易「再到襄陽訪問旧居」に「独り秋江の水有りて／煙波 旧時に似たり」。○凡桃俗李 ありふれたものやすも。平凡な人間の喩え。明の王冕「題墨梅図」に「凡桃俗李 芬芳を争い／只だ老梅有り 心自ら常あり」。○唸「唸」は「吟」に同じ。ここは歌を詠む。○梅藥 梅のつぼみ。

書齋の窓に春の日差しはさして、春の日はゆっくり流れていきます。今年も新たな歳を迎えました。この新春も昔と変わらぬどかです。わたしの詩は平々凡々。それにひきかえあなたの詠梅の和歌は世の人々がみな称賛してやまない所です。

【余説】序文によれば岩井信能の梅の歌に先立って、兼統の「試毫の韵」があったはずだが、それは伝わっていない。この詩は岩井信能の返歌に対する返し。岩井信能の描く「梅」に対比して自らの詩を「凡桃俗李」と謙遜している。

《10》人日

人日

人日江城更幾回

人日 江城 更に幾回ぞ

園林春至興多哉

園林に春至りて 興多き哉

料知次第東風好

料り知る 次第に 東風好きを

二十四番纒過梅

二十四番 纒に梅を過ぐ

▽七絶。上平声十灰韻(回、哉、梅)。

□底本 自筆色紙。林泉寺藏。『定本直江兼統』(二〇一〇年、郷土出版社) 一七五頁。

●作詩年次未詳。起句に「江城」(江戸の町)とあるところから、兼統が江戸に詰めていたある年の正月七日の作と想像されるが、何時かは不明。

○人日 正月七日を人日という。『荆楚歲時記』に「正月七日、之を人日と謂う。七種の菜を採り、以て羹を為る。」○江城 本来は川のほとりの町の意。李白「与史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」に「黃鶴樓中 玉笛を吹く／江城 五月落梅花」。ここは江戸の町を指すか。○更幾回 あと何回迎えられるか。杜甫「絶句漫興九首」其四に「二月已に破れて三月来る／漸老 春に逢う能く幾回ぞ」。○園林 花や木が植えられ、亭などもあって、人が眺めたり休んだりできる場所。晋の張翰「雜詩」(『文選』卷二十九)に「暮春和氣応じ／白日 園林を照らす」。杜審言「渡湘江」に「遲日園林 昔遊を悲しむ／今春花鳥 辺愁を作す」。○興多 興趣ゆたか。李白「送賀賓客 帰越」に「鏡湖流水 清波漾い／狂客の帰舟 逸興多し」。杜甫「覽物」に「曾て掾吏と為りて三輔に趨る／憶う潼関に在りて詩興多し」。○料知 推測して知る。岑参「走馬科行奉送出師西征」に「料り知る短兵敢て接せざるは／車師西門に獻捷を佇(ま)つを」。○次第 順序。また順を追って、つぎつぎに。李紳「欲到西陵寄王行周」(『三体詩』卷二)に「舟人の次第

無きを責めんと欲すれども／自ら知る 酒を食って春潮を過せしを」。劉禹錫「秋江晚泊」に「暮霞千万状／賓雁次第に飛ぶ」。○東風好 東風は春風。○二十四番 「二十四番花信風」のこと。小寒から穀雨に至る四か

月を五日ごとに分けて合せて二十四候とし、小寒の一候梅花、二候山茶、三候水仙、大寒の一候瑞香、二候蘭花、三候山礬、…と花のたより(花信風)をそれぞれに当てはめ、最後は穀雨の三候棟花に至る二十四番で寒が終わるといふもの。『荆楚歲時記』等に見える。○纒過梅 二十四番花信風の一番最初、小寒の一候梅花が過ぎたばかりということ。「纒」はやつと。ほんのすこし。

正月七日の人日を迎えて、ふとこれからあと何回この江戸の町で人日を迎えることになるのかと思う。春はようやくこの庭園にもやって来て、まことに趣深い。季節の推移に従って春風もやがていい具合に吹いてくるだろうが、いまはまだ春にようやく入ったばかり、二十四番の花信風もやつと第一候の梅花が過ぎたばかりだ。

《11》賦人日詩

人日を賦する詩

従五位下 豊臣兼統 従五位下 豊臣兼統

佳辰令月得春来

佳辰令月 春の来るを得たり

人日題詩更幾回

人日 詩を題するは 更に幾回ぞ

猶説風流千歳後

猶お説く 風流千歳の後

含章楼下寿陽梅

含章楼下 寿陽梅

▽七絶。上平声十灰韻(来・回・梅)。

□底本 遠藤本に拠る。木村本、渡辺本同じ。

●作詩年次未詳。兼統が従五位下、山城守に叙任され、秀吉から豊臣の姓を許されたのは天正十六年（一五八八）八月十七日、二十九歳の時である。遠藤綺一郎氏はこの詩を、その頃作られたものとされる。しかし同じく「山城守 豊臣兼統」と記す「春日賦花契還年詩」が慶長三年（一五九八）、三十九歳、醍醐の花見の際の歌会の詩と考えられることからすれば、この詩もその年前後の正月七日の作の可能性もある。「人日詩を題するは更に幾回ぞ」という口吻からすれば、若年よりはむしろ後年の作と見た方がよさそうである。

○人日 正月七日を人日という。『荆楚歲時記』に「正月七日、之を人日と謂う。七種の菜を採り、以て羹を為る。」とあり、またその杜公瞻の註に引く董勳の『問礼俗』に「正月一日を鶏と為し、二日を狗と為し、三日を羊と為し、四日を猪と為し、五日を牛と為し、六日を馬と為し、七日を人と為し、陰晴を以て豊耗を占う」とある。○佳辰令月 佳辰はよい日、令月はよい月。ここは正月七日の人日を指す。韋応物「大樑亭会李四樓梧作」に「置酒して清弾を発し／相与に佳辰を樂しむ」。杜甫「小寒食舟中作」に「佳辰強いて飲めば食猶お寒く／凡に隠りて蕭条 鶡冠を戴く。」「令月」の用例は見当たらない。○人日題詩 「題詩」は詩を書き付ける。高適「人日寄杜二拾遺」に「人日詩を題して草堂に寄す／遙かに憐れむ 故人の故郷を思うを」。杜牧「念昔遊」(『三体詩』卷二)に「李白詩を題す水西寺／古木回巖樓閣の風」。○更幾回 あと何回できるのか。杜甫「絶句漫興九首」其四に「二月已に破れて三月来る／漸老 春に逢う 能く幾回ぞ」。○風流 風雅で潇洒な感覚。情趣を理解する文学的雰囲気。『後漢書』方術伝論に「漢の世の所謂名士なる者は、其の風流知る可し」。李嘉祐「送王正字山寺讀書」(『三体詩』卷三)に「風流にして佳句有り」。牟融「送友人」に「衣冠 文物を重んじ／詩酒 風流足る」。○含章楼下寿陽梅 「含章楼」は南朝宋(四二〇～四七九)の宮殿、含章殿。「寿陽」は宋の武帝のむすめ寿陽公主のこと。正月七日の人日に、寿陽公主が含章殿の窓の下で横になつていたところ、梅の花びらがひらひらと公主の額の上に落ちて、五弁の花の形になった。これを払っても落ちず、そのまま額の化粧として「梅

花妝」と称した。宮廷の女人たちは競ってその化粧法をまねた、という話が『宋史』(『太平御覽』卷九七〇所引)に見える。宋・陳自齋「宮妝」(『聯珠詩格』卷十七)に「浅く蛾眉を画き 薄く腮(あご)に傅(ふ)す／淡妝雅称す 寿陽梅」。

一月七日、人日の佳き日、今年もこうして春を迎えることができた。この人日に詩を作ることができるのは、あと何回か。人日といえれば思い出す、宋の武帝のむすめ寿陽公主のこと。含章殿の窓の下で横になつていたところ、梅の花びらが額の上に落ち、払っても落ちず、それをそのまま額の化粧として「梅花妝」と称した。宮廷の女人たちは競ってその化粧法をまねた、という優雅な話。その風流は千年のちの今日まで人々の口のにぼるほどだ。

【余説】化粧の話題が詩の材料になつているところから想像すれば、人日の祝いに女性が列席しているような場での吟詠か。

《12》春日賦花契還年詩 春日 花を賦し 還年を契るの詩

山城守 豊臣兼統

山城守 豊臣兼統

吟賞群紅開雅筵

群紅を吟賞して雅筵を開く

雨餘春色最堪憐

雨余の春色 最も憐れむに堪う

花縦無語自相賀

花縦い語無きも自ずから相賀す

子葉孫枝億万年

子葉孫枝 億万年

▽七絶。下平声一先韻(筵・憐・年)。

□底本 個人蔵「紙本墨書 春日賦花七絶 直江兼統書」。山形県の文化財検

索サイト「山形の宝検査navi」に画像あり。

<http://www.pref.yamagata.jp/cgi-bin/yamagata-takara/?m=detail&id=1477>

●作詩年次未詳。慶長三年（一五九八）三月十五日、三十九歳、醍醐の花見の際の歌会の詩か。（なお兼統が山城守に叙任され、秀吉から豊臣の姓を許されたのは天正十六年（一五八八）八月十七日、二十九歳の時である。）

山形県酒田市中町二丁目の小野太右衛門家に「紙本墨書 春日賦花七絶直江兼統書」（縦30.7cm×横40.3cm）が所蔵されており、県指定文化財（昭和三十七年一月二日指定）となっている。画像は山形県の文化財検索サイト「山形の宝検査navi」で見られる。

なお同サイトによれば、「この書は慶長三年（一五九八）三月十五日、京都伏見の醍醐寺の五重塔が完成したのを機に、秀吉が行った醍醐の花見の際に、兼統も陪臣の身ながら招かれ、…この詩を詠んだ」とある。この作詩年の同定が何によるか不明だが、承句の「雨餘の春色」の語が、醍醐の花見の当日、前日までの風雨がうそのように止み、絶好の花見日和となったとの記録と一致するところから、当を得ているように思われる。

○契週年 「週年」は高齢、長寿。また遥かに長い年月。魏の曹植「王仲宣誄」（『文選』卷五十六）に「週年にして手を携えて同に征かんと庶幾（ねがいしに、如何ぞ奄忽（たちまち）ち我を棄てて夙に零せる」。左思「魏都賦」（『文選』卷六）に「則ち衰世なりと雖も、盛徳管弦に形れ／千祀を踰えたりと雖も 旧氣を懐うて週年に蘊（つ）まれたり」。ここは恐らく秀吉の長寿を祈る、あるいは「子葉孫枝 億万年」と豊臣の世の末永く続かんことを約束するの意だろう。ちなみにこの年八月、秀吉死去、六十二歳。 ○吟賞 吟詠し鑑賞する。顧況「梅湾」に「山深くして吟賞せず／辜負して蒼苔に委ぬ」。宋の姜夔「清波引」序に「勝友二三と意を極めて吟賞す」。 ○雅筵 高雅な宴飲の催し。雅宴（仄声霰韻・雅燕（同上）に同じ。押韻のため一先韻の筵をつけて雅筵とした。李白「春夜宴桃李園序」（『古文真宝後集』卷三）に「瓊筵を開いて以て華に坐し、羽觴を飛ばして月に酔う」とある

「瓊筵」に同じ。 ○雨餘 雨上がり。鄭谷「曲江春草」（『三体詩』卷二）

に「花落ちて江隄に暖烟簇る／雨餘の草色遠く相連なる」。来鵬「清明日与友人遊玉塘莊」（『三体詩』卷二）に「風急にして嶺雲 迴野に飄えり／雨餘の田水 芳塘に落つ」。 ○春色 春の景色。梁の沈約「泛永康江」に「山光は水に浮かびて至り／春色は寒を犯して来る」。謝朓「和徐都曹」に「春色 皇州に満つ」。また王安石「夜直」（『聯珠詩格』卷三）に「春色人を悩まして睡り得ず」。 ○堪憐 心寄せられるものがある。徐鉉「和尉遲贊善秋暮僻居」に「登高節物 最も憐れむに堪う／小嶺疏林 檻前に対す」。

○花縦無語 花はものを言うことができないが。嚴憚「絶句」（『聯珠詩格』卷十九）に「尽日花に問うも花は語らず／誰が為にか零落し誰が為にか開く」。宋の歐陽脩「蝶恋歌（庭院深深）」に「目に涙して花に問うも花は語らず／乱紅秋千を飛び過ぎて去る」。宋の蘇軾「玉盤盂」其の二に「花は言う能わざるも意は知る可し／君をして痛飲せしめん 更に疑うこと無かれ」。明の高啓「問梅閣」に「月堕ちて花言わず／幽禽自ずから相語る」など。「縦」は仮設の辞。たとひ。かりにとしても。

醍醐寺の桜も今が盛り、豪華な花見の宴が開かれ、花を眺めながらの詩会が催される。夜来の雨もすっかり上がって、絶好のお花見日和。この春の景色にはまことに心うっとりさせられる。花はもの言うことはできないが、美しく咲き乱れて言祝いでいるようである。枝が伸び葉が茂って、億万年も咲き続けるように、豊臣の繁栄が限りなく続きますことを。

【余説】遠藤綺一郎氏はこの詩を解説して次のように述べておられる。「兼統は天正十六年（一五八八）、主君上杉景勝に伴われて上洛した節、従五位下、山城守に任せられ、豊臣の姓を名乗ることを許された。この詩とその前の詩（『賦人日詩』）とは、その頃作られたもの。共に花木の繁栄を折り讃えているが、豊臣秀吉の政権の盛んな時代を反映して、のびやかな気分満ちている。豊臣政権の長き安泰と自家の繁栄を祈る心も寓されている。」（『直江兼統伝』二二〇頁）。

しかし前述のように、慶長三年（一五九八）三月十五日、醍醐の花見の

際の歌会の詩と見るべき可能性の方が高い。詩の趣旨は遠藤氏の言われる通りで、題下に「山城守 豊臣兼統」と記すのも、秀吉主宰の花見の歌会に列しての作詩ゆえ、秀吉に敬意を表してのことであろう。

《13》売花

花を売る

春日売花色亦奇 春日 花を売る 色亦た奇なり

東阡西陌路参差 東阡西陌 路参差

黄金用尽園成市 黄金用い尽くして 園 市を成す

只扱紅香不扱枝 只だ紅香を扱ひ 枝を扱はず

▽七絶。上平声四支韻(奇・差・支)。

□底本 米沢市立図書館郷土資料室所蔵の甘粕家寄贈文書に含まれている。直江兼統の漢詩短冊に記されている漢詩。「新発見 直江兼統の漢詩短冊」(『広報よねざわ』(山形県米沢市発行)平成十九年七月一日号所載)の「郷土資料の散歩道」に写真あり。

<http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/secure/3982/zentaipdf>

●作詩年次未詳。「東阡西陌路参差／黄金用尽園成市」などの表現から、洛中の作か。

○売花 白居易に「花を買う」という諷諭詩がある。「帝城 春暮れんと欲し／喧喧として車馬渡る／共に道う牡丹の時と／相隨いて花を買いに去く／…／一田舎翁有り／偶たま花を買う所に來る／頭を低れて独り長嘆す／此の嘆き人の論る無し／一叢深色の花／十戸中人の賦」。兼統はそれを意識して「花を買う」に対して「花を売る」としたのであろう。○春日売花色亦奇 白居易「牡丹芳」に「穠姿貴色 信に奇絶／雜卉乱花 比方無し」。○東阡西陌 「東西の阡陌」の互文。「阡」は南北の路。「陌」は東

西の路。陶淵明「桃花源記」に「阡陌交わり通じ／鷄犬相聞こゆ」。江淹「雜体詩・田居」(『文選』卷三十一)に「苗を種えて東臯に在り／苗生じて阡陌に満つ」。○参差 ふぞろいなさま。崔魯「長安春日即事」(『三体詩』卷二)に「一百五日又た來らんと欲し／梨花梅花参差として開く」。杜牧「題宣州開元寺水閣」(『三体詩』卷二)に「参差たる烟樹 五湖の東」。○黄金用尽 黄金を(空しく)使い果たす。司空曙「病中嫁妓」(『聯珠詩格』卷九)に「黄金用い尽くして歌舞を教え／他人に留与して少年を樂しましむ」。○園成市 任昉「為范尚書讓吏部封侯第一表」(『文選』卷三十八)に「齊季陵遲して／官方に淆乱す／鴻都是綱あらず／西園は市を成す」。○扱紅香不扱枝 白居易「牡丹芳」に「花開き花落ちて二十日／一城の人皆な狂えるが若し／三代以還 文質に勝り／人心華を重んじて実を重んぜず」。また「買花」に「貴賤常備無く／酬直花の数を看る」。

春の日に花を売る、賑やかな街角。東西にひろがる道が交錯するところ。花を買うために人々は黄金を使い果たし、どこも人込みで市をなす。ただ赤い花、香りのよい花を買いたい、大事な枝ぶりなど見向きもしない。

【余説一】『広報よねざわ』(山形県米沢市発行)平成十九年七月一日号所載の「郷土資料の散歩道」に「新発見 直江兼統の漢詩短冊」として、米沢市立図書館郷土資料室所蔵の甘粕家寄贈文書に含まれていた直江兼統の漢詩短冊が写真付きで紹介された。短冊の上部中央に「売花」、その下に漢詩を二行に、そして下部中央に「兼統」と記されている(この形式は「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」の短冊と同じである)。

紹介記事によれば「これまで紹介されたことのない、新発見の漢詩です。少し傷みがありますが、直江独特の筆跡で認(した)められています。この新発見によって、兼統が詠んだ漢詩がまた一つ増えたことになりました」とある。

さらに甘粕家に関しては、やはり上の紹介記事に次のように記されている。「甘粕家は侍組(上級家臣団)の家柄で、上杉景勝の家臣甘粕景継は酒田城主や白石城主を務めた勇将で、幕末期の甘粕継成は『鷹山公偉蹟録』

をまとめた人物です。平成十四年に子孫の方から寄贈された一六六二点に及ぶ膨大な古文書類の中には、景勝や直江兼続の書状など、貴重な資料が多く含まれています。」

【余説二】白居易の諷諭詩「買花」や「牡丹芳」を下敷きにして、おそらく上方の人士が花にうつつを抜かすのを皮肉ったもの。花の色や香りなど外面的なものを選択基準にして、大事な枝幹に目もくれないのを批判的なまなざしで見ている。「黄金用い尽くして」や「園は市を成す」の表現は注に触れた出典の文脈からも読み取れるように明らかに貶下の意味あいを持つ。

《14》浦夏月

浦の夏月

夏天雲霽月明時

夏天 雲霽れて 月明らかなる時

浦口風涼興最奇

浦口 風涼しく 興最も奇なり

一夜清光映漁戸

一夜 清光 漁戸に映じ

人間塵暑不曾知

人間の塵暑 曾て知らず

▽七絶。上平声四支韻(時・奇・知)。

□底本 遠藤本に拠る。木村本同じ。

●作詩年次未詳。木村徳衛云う、「此詩は加賀前田家の旧蔵、今保阪潤治の所蔵で、竪一尺二寸・巾一寸八分の短冊である。」

○夏月 夏の月。白居易「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」に「南簷日を納れて冬天暖かに／北戸風を迎えて夏月涼し」。○夏天 夏の空。夏の日。王建「昭応官舎書事」に「夏天渭に臨んで屋涼多し」。韋忠物「休暇東齋」に「夏天曉露清し」。○月明 月が明るい。「楽府・傷歌行」(『文選』卷二十七)に「昭昭として素月明らかに／暉光我が牀を燭らす」。

○浦口 入江の口。何遜「夜夢故人」に「浦口斜月を望み／洲外長風を聞く」。庾信「詠画屏風」に「平沙浦口に臨み／高柳樓前に対す」。○風涼 風が涼しい。魏の劉公幹「公讌詩」(『文選』卷二十)に「華館流波寄せ／豁達風涼來る」。宋の范成大「夏日田園雜興」(『聯珠詩格』卷十七)に「門前の磐石を借与して坐すれば／柳陰の亭午正に風涼し」。○清光 月の清らかな光。江淹「望荆山」(『文選』卷二十七)に「寒郊留影無く／秋日清光懸る」。沈約「応王中丞思遠詠月」(『文選』卷三十)に「洞房殊に未だ暁けず／清光信に悠なる哉」。白居易「八月十五日夜禁中直對月憶元九」に「猶お恐る清光同じく見ざるを／江陵は卑湿にして秋陰足(おお)し」。

○漁戸 漁師の家。元の戴表元「江行雜書」に「須臾にして雷風深墨に漲り／漁戸悉く閉じて牛羊を収む」。漁師は中国では古来、隱者に喩えられる。○塵暑 世俗の塵や暑さ。この言葉、唐から宋の詩には見えない。夏の夜空は雲も晴れて月が清らかに輝いている、いまこの時。入江の風は涼しく、その興趣たるや、この上なく素晴らしい。この夜、清らかな月の光は漁師の篷屋をさえざざと照らしている。ここは俗世間の塵も暑苦しさも全く無縁の世界だ。

《15》残暑促倣装

残暑 倣装を促す

鈞齋

鈞齋

溽暑纒残池水湾

溽暑纒かに残る 池水の湾

且将团扇廢投閑

且く团扇を將て廢して閑に投ず

倣装簡易早歸去

倣装簡易にして 早に歸り去かん

浙瀝穠声在樹間

浙瀝たる穠声 樹間に在り

▽七絶。上平声十五刪韻（湾・閑・間）。

□底本 特別展「直江兼統」図録（二〇〇七年、米沢市上杉博物館）六九頁に「上杉家文書」のうち「直江兼統筆五山衆等詩」（三八・一×一八・四cm）として写真あり。

△「溽暑」、木村本作「溽暑」、誤也。

●作詩年次未詳。夏の終わり秋の初め。按ずるに元和元年（一六一五）、大坂夏の陣の後、六月米沢に帰ろうとするとき、京都で自邸に五山の僧たちを招いて催した別れの宴の席での作か。

上杉家文書「（包紙ウハ書）京都直江山城守宅にて 五山衆詩」として「残暑促俶装」の題詠で、十人の七絶十首を記す。すべて兼統の自筆。

木村徳衛「直江兼統伝」一六九頁に云う、「兼統（重光）が京都の直江邸に五山衆を招いて詩会を催した時の兼統自筆の五山衆等の詩が、今も上杉家に所蔵せられて居るが、兼統（重光）は始め江斎と号し、後鈎斎と改め、この詩会には鈎斎の号を用いてある。」と。

○残暑 沈佺期「酬蘇員外味玄夏晚直省中見贈」に「窓を開けば月露微かに／小池残暑退く」。○俶装 身支度をする。旅装を整える。後漢の張衡「思玄賦」（『文選』卷十五）に「占既に吉にして悔い無く／元辰を簡（えら）んで俶（はじめ）めて装う」（李善注に「俶は始なり」。『後漢書』張衡伝の李賢注には「俶は整なり」。）○溽暑 「溽」は蒸し暑い。柳宗元「夏昼偶作」（『三体詩』卷二）に「南州の溽暑 酔うて酒の如し／凡に隠りて熟眠し 北牖を開く」。○团扇 うちわ。白居易「雨後秋涼」に「夜来秋雨の後／秋気颯然として新たなり／团扇先ず手を辞し／生衣身に著けず」。宋の蘇轍「感秋扇」（『聯珠詩格』卷十）に「团扇 秋を経て敗荷に似たり／丹青髣髴す 旧松蘿」。○投閑 閑職に置く。ここは使わずに捨ておく意。韓愈「進学解」（『古文真宝後集』卷二）に「動（や）やもす」れば誇りを得、名も亦たこれに随う。閑に投じ散に置く、乃ち分の宜しきなり」。○帰去 帰ろう。陶淵明「歸去來兮辞」に「歸去來兮（かえりなんいざ）／田園將に蕪れなんとす 胡ぞ帰らざる」。○浙瀝 風の音のさま。謝惠連「雪賦」（『文選』卷十三）に「霰は浙瀝として先ず集まり／雪は粉糝して遂に

多し」。○穠声 「穠」は秋。秋の風音。北周・庾信「周譙国公夫人步陸孤氏墓誌銘」に「樹樹秋声、山山寒色」。丁仙芝「渡揚子江」に「更に聞く楓葉の下／浙瀝として秋声渡る」。李頎「望秦川」（『三体詩』卷三）に「秋声万戸の竹／寒色五陵の松」。○樹間 木々の間。「古詩十九首」其七に「秋蟬樹間に鳴き／玄鳥逝きて安くにか適く」。

蒸し暑さがわずかに残る池のほとり。しばらく团扇はかたわらに置いておくか。さあそうしてさつと帰り支度をして早く帰ることにしよう。さやさやと樹の間に秋風が渡ってきたよ。

【余説】秋風の吹き初めるのを聞いて故郷に帰りたくなるというモチーフは、晋の張翰の鱸魚の話が有名。「張季鷹（張翰）、齊王（司馬罔）の東曹掾に辟かれ洛（陽）に在り。秋風の起るを見て、因りて吳中の菰菜の羹、鱸魚の膾を思いて曰く、人生意に適うを得るを貴ぶのみ。何ぞ能く宦に羈がれて数千里、以て名爵を要めんやと。遂に駕を命じて便ち帰る。」（『世説新語』識鑒篇）。この齊王罔なる者は、西晋末のいわゆる八王の乱で、惠帝を幽閉して帝位に就いた趙王倫を殺し、惠帝を復位させ、自ら宰相の位に就いて実権を握ったが、専横を極めたために、長沙王乂に殺されたという、評価芳しからざる人物である。そうなる前に齊王罔のものとをさつさと去った張翰は「識鑒」、ひとを見る目があつたというわけである。この秋風の音を聞いて故郷に帰ったという張翰のエピソードが、別れの宴に集った京都五山の僧たちの意識にあつたことは、参会者の一人玄召棠陰の詩句に「種風起る日 炎蒸去る／正に是れ張翰機を見るに似たり」とあることから明らかである。だとすると米沢に帰る兼統は張翰になぞらえられているわけで、齊王罔に寓されるのはさしずめ家康というところか。

《16》織女惜別

織女別れを惜しむ

二星何恨隔年逢

二星何ぞ恨みん 年を隔てて逢うを

今夜連床散鬱胸

今夜床を連ねて 鬱胸を散ず

私語未終先洒涙

私語未だ終らざるに 先ず涙を洒ぐ

合歡枕下五更鐘

合歡枕下 五更の鐘

▽七絶。上平声二冬韻(逢・胸・鐘)。

□底本 遠藤本に拠る。

△「隔年」一作「隔河」。「未終」一作「未語」。

●作詩年次不詳。

○織女惜別 織女の立場で、わずかな逢瀬の後、牽牛との別れを惜しむ心を歌った。 ○二星 牽牛星と織女星。 ○隔年 年を隔てて一年ぶりに

(一年おきの意味での「隔年」ではない)。 ○鬱胸 一年も逢えずにふさがれた胸の内。この語、漢語には見えない。おそらく兼続の造語で、押韻の関係で胸の字をもってきたのであろう。 ○私語 愛のささやき。白居易「長恨歌」に「七月七日長生殿／夜半人無く私語の時／天に在りては願

わくは比翼の鳥と作(な)り／地に在りては願わくは連理の枝と為らんと」。 ○洒涙 涙をそそぐ。また「灑涙」とも(「灑」は「洒」に同じ)。魏の曹植「鞞舞歌靈芝篇」に「退いて南風の詩を詠じ／涙を灑いで裊袍に満つ」。杜甫「詠懷古跡」其二に「千秋を悵望して一に涙を灑ぐ／蕭條異代 時を同じ

くせず」。ちなみに陰暦七月七日に降る雨を「灑涙雨」という。『歳時広記』七夕上に「七月六日、雨有り、之を洗車雨と謂う。七日雨ふれば則ち灑涙雨と云う」。 ○合歡 男女の共寝。古詩十九首(其の十八)(『文選』卷

二十九)に「文綵双鴛鴦／裁ちて合歡の被と為す」。班婕妤「怨歌行」(『文選』卷二十七)に「裁ちて合歡の扇と為す／团团として明月に似たり」。

○枕下 ふつう枕辺、枕頭、枕上などというところ、二人は天上において、五更の鐘の音は地上から聞こえてくるので、枕下という表現になる。 ○

五更 五更は午前四時ごろ。後朝の別れの刻。

牽牛さんとわたくし(織女)と、今宵七夕の夜、一年ぶりに逢うことが出来ました。ひさしぶりにあなたと床をとにもすることができて、ふさいでいた胸もすつきり晴れました。今や何の恨むことがございませう……。しかし二人の愛のささやきもいまだ終わらぬというのに、早くも涙がこぼれて来ます。共寝の枕辺には、はや五更の鐘が響いて来るのですもの。

【余説】織女の立場で、わずかな逢瀬の後、牽牛との別れを惜しむ心を歌っている。これも恐らく「織女惜別」の題を与えられての題詠であらう。

ただし遠藤綺一郎氏は云う、「当時のことだから、牽牛・織女のこととして風雅らしく詠じているけれども、二星のことは看板にすぎなくて、それに託して実は忍び逢うこともままならぬ男女の、哀切な恋愛をうたった詩であることに気づかれよう。」(『直江兼続伝』(二〇〇八、酸漿出版)。

この詩は慶長七年(一六〇二)の亀岡文殊堂奉納詩歌百首の一(其の五)の題詠「逢う恋」(↓《15》)と発想・内容が酷似している。「風花雪月情に閑せず／邂逅して相逢わば 此の生を慰む／私語今宵 別るれば無事／共に修む 河誓又た山盟」。この「織女惜別」も題詠であらうから、「逢う恋」のところでも述べたように、あまり現実に引き付けて理解するのは問題であらう。ただ多くの人がそのように理解したくなるような現実味をこの詩が持っているということは、兼続が武人でありながら、男女の心の機微も深く理解している人物だったということを示している。

《17》洛中之作

洛中之作

独在他郷憶旧遊

ひとり他郷に在りて 旧遊を憶う

非琴非瑟自風流

琴に非ず瑟に非ず 自ら風流

团团影落湖辺月

团团の影は落つ 湖辺の月

天上人間一様秋

天上人間 一様の秋

▽七絶。下平声十一尤韻(遊・流・秋)。

□底本 遠藤本に拠る。木村本、渡辺本同じ。

●木村徳衛云う、「この詩は上杉家記には、元和五年兼統在洛の時、中秋明月夜の作としてある」と。元和五年(二六一九)秋八月十五日、六十歳。

○洛中 京都。元和五年(二六一九)五月、景勝に従い入洛。六十歳。

○独在他郷 王維「九月九日憶山東兄弟」に「独り異郷に在りて異客と為る」。○憶旧遊 かつての旅(京都滞在)を思い出す。顧況「洛陽早春」

(『三体詩』卷三)に「何れの地にか春愁を避けん／終年旧遊を憶う」。宋の鄭會「寄熊秋堂」(『聯珠詩格』卷十一)に「酔うて青山を踏んで旧遊を憶う／両年流落す古杭州」。○非琴非瑟 琴瑟の「瑟」は大型の琴。晋・陸機「擬西北有高樓」(『文選』卷三十)に「佳人琴瑟を撫し／織手清且つ閑。陳子昂「春夜別友人」に「離堂琴瑟思い(琴や瑟が別離の思いを込めた曲を奏でる)／別路山川繞る」。ここで「非琴非瑟」というのは、かつての「旧遊」(京都を訪れた時のように、華やかに琴を奏でるような雰囲気は今はなくとも、という意味だろう。あるいはそういうにぎやかさは今は不要だ、という気分、静けさを愛する気持ちを示す表現といえるかもしれない。晋の左思「招隱詩」(『文選』卷二十二)に「必ずしも糸と竹とに非ず／山水に清音有り」。宋の歐陽脩「醉翁亭記」(『古文真宝後集』卷四)に「宴酣(たけなわ)なるの楽しみは糸に非ず竹に非ず」。楊万里「松声」(『聯珠詩格』卷三)に「金に非ず石に非ず糸竹に非ず／万頃の銀濤五湖に殷たり」。蔡正孫「天籟」『聯珠詩格』卷十七)に「万竅調刁噫嗒の声／竿に非ず鐸に非ず亦た琴に非ず」。○風流 風雅で瀟洒な感覚。情趣を理解する文学的雰囲気。『後漢書』方術伝論に「漢の世の所謂名士なる者は、其の風流知る可し」。李嘉祐「送王正字山寺讀書」(『三体詩』卷三)に「風流にして佳句有り」。牟融「送友人」に「衣冠文物を重んじ／詩酒風流足る」。○团团影 班婕妤「怨歌行」(『文選』卷二十七)に「裁ちて合歡の扇と為す／团团として明月に似たり」。韓愈「夕次壽陽驛題吳郎中詩後」

(『聯珠詩格』卷十)に「園桃と巷柳とを見ず／馬頭唯だ有り月团团」。「影」は光の意。○湖辺 「湖」が具体的にどこを指すのかは不明。琵琶湖は「洛中の作」とすれば遠いし、屋敷の池などを指すか。鄭谷「鷓鴣」(『三体詩』卷二)に「雨昏く青草湖辺に過り／花落ちて黄陵廟裏に啼く」。鄭常「寄邢逸人」(『三体詩』卷三)に「若し湖辺の意を問わば／而今共に帰らんことを憶う」。杜甫「陪尚書李中丞過鄭監湖亭泛舟」に「海内文章伯く／湖辺意緒多し」。○天上人間 天の上も人の世も。(本来は天上の世界と人の世の隔たりを意味する成語だが、ここは両方とも意で使っている)。白居易「長恨歌」に「但だ心をして金鈿の堅きに似しむれば／天上人間会ず相見えん」。南唐の李煜「浪淘沙令」に「流水落花春去りぬ／天上人間」。○一様秋 兼統「元日」の詩にも「新を迎え旧を送り桃符を換う／万戸千門一様の春」とある。

ひとり遠い京都に在って、若いころここで過ごした時代を思い出す。いまここには昔の華やかな管弦の調べはないが、それでも、あるいはそれ故にこそ、自ずから風流は味わえる。池の水面に映るまん丸の月。天の上も人の世界もすべて同じ秋。

《18》有感

感有り

風竹蕭蕭梧葉黃

風竹蕭蕭として 梧葉黄ばむ

相思寸寸断人腸

相思寸寸 人の腸を断つ

一声塞管来何処

一声の塞管 何れの処よりか来る

雁帶秋雲入故郷

雁は秋雲を帯びて 故郷に入る

▽七絶。下平声七陽韻(黄・腸・郷)。

□底本 個人蔵自筆書幅(一六・八×一五・二cm)。『図説直江兼統人と時

代』(二〇一〇年、米沢上杉文化振興財団)一六四頁。
●作詩年次未詳。

○風竹 風にそよぐ竹。武元衡「宿青陽駅」に「寂寞たる銀燈 愁いて寐ず／蕭蕭たる風竹 夜窗寒し」。白居易「秋涼閑臥」に「露荷 清香を散じ／風竹 疏韻を含む」。○蕭蕭 風の音のさびしげなさま。『史記』荊軻伝に「風は蕭蕭として易水寒し」。また木の揺れ動くさま。『楚辭』九歌に「風は颯颯 木は蕭蕭」。○梧葉 あおぎりの葉。劉禹錫「早秋雨後寄樂天」に「梧葉 風に先んじて落ちて落ち／草虫 湿を迎えて吟ず」。丘丹「和韋使君秋夜見寄」に「露滴りて梧葉 鳴り／秋風に桂花 発く」。○相思寸寸 思いは千々に乱れる。劉兼「秋夕書懷呈戎州郎中」に「鸞膠 処処 尋覓し難く／断じ尽す 相思寸寸の腸」。○塞管 辺境のとりでで吹く笛の音。杜牧「張好好詩」に「繁弦 関紐より 迸り／塞管 円蘆を 裂く」。馮延巳「清平樂(深冬寒月)」に「風雁 過ぐる時 魂断絶し／塞管 数声 鳴咽す」。宋の范成大「北門覆舟山道中」に「雁字 江天 塞管を 聞く／梅梢 山路 溪橋を 欠く」。○秋雲 秋の雲。岑参「送成州程使君」(『三体詩』卷三)に「江樓 寒雨 暗く／山郭 秋雲 冷やかなり」。盧綸「山店」(『三体詩』卷一)に「風葉 声を 動かして 山大吠ゆ／一家の 松火 秋雲を 隔つ」。

竹にそよぐ風はさやさやと鳴り、あおぎりの葉は黄色くなった。季節に感じて思いは千々に乱れる。辺境のとりでで吹く笛の音は、どこから流れてくるのか。雁は秋の雲に乗って故郷に帰ってゆく。

《19》〔失題〕

〔失題〕

遠山西望西明寺

遠山 西に望む 西明寺

緬憶時頼投矣秋

緬かに憶う 時頼投矣〔宿〕の秋

暮月林間將輾外

暮月林間 將に外〔上〕に輾せんとして

若斯 無端衣色金風流

端無くも衣色に 金風流る

▽七絶。下平声十一尤韻(秋・流)起句踏落し。

□底本 木村本に拠る。

△木村德衛『直江兼統伝』に引く「兜山夜話」によれば、「西望」作「村裡」。「矣」作「宿」。「間」作「端」。「外」作「上」。「無端」作「若斯」。「金」作「遇」。木村德衛は続けて云う「尚誤字があるものと思われる」。ここでは「矣」を「宿」に、「外」を「上」に改め、他は底本どおりとしておく。

いま西明寺境内にこの詩の碑が立っている。碑文はすべて書き下し文で「西明寺展望に題す」と題し、「遠山西に望む西明寺／はるかに憶う最明寺投宿の秋／暮月林間まさに外にめぐらんとし／無端の衣色金風に満つ」とある。(「時頼」作「最明寺」。「流」作「満」。)やはり意味がよくわからない。

●作詩年次未詳。木村德衛云う、「この詩は、休日、兼統 西の山辺に紅葉狩の時、黄昏、上長井より遠山邑の西明寺を望んで詠じた七絶である」と。

○遠山 詩の言葉としては遠い山の意だが、地名の遠山村(西明寺の所在地)でもあろう。○緬憶「緬」は遙か。はるかに憶う。回想する。明の劉若愚「酌中志・見聞瑣事雜記」に「緬かに君の容を憶えば、宛然として目に在り」。○西明寺 山形県米沢市東山町にある恵日山西明寺(真言宗豊山派)。余説に載せる寺の由緒書参照。○時頼 鎌倉幕府の執権北条時頼(一二二七～一二六三)、後に出家して最明寺入道時頼と号した。出家後は身分を隠して諸国を巡遊し、地方の実情を観察して回ったという回国伝説がある。特に鉢の木伝説が有名。○投宿 やどにつく。泊る。漢・劉向「九嘆・逢紛」に「平明 蒼梧を 発ち／夕べに 石城に 投宿す」。○暮月 夕暮れ時の月。漢語では「春暮の月」という言葉はあるが、「暮月」は見えない。○林間 林の中。孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷十一)に「朱闕 林間に 玲瓏として／玉堂 高隅に 陰映たり」。司空圖「柏梯寺懷旧僧」(『三体詩』卷三)に「縦い人の相問う有りとも／林間 書を 拆くに 懶し」。

白居易「送王十八歸山寄題仙遊寺」に「林間に酒を暖めて紅葉を焼き／石上に詩を題して緑苔を払う」。○輓外「輓」は車の車輪をきしらせる、めぐらせる。鄭谷「曲江春草」（『三体詩』卷一）に「香輪 青青を輓（きし）り破ること莫れ」。陸龜蒙「和皮日休酬茅山広文」（『三体詩』卷二）に「会（かならず）輓輪を輓（めぐ）らせて玉皇に見ゆ」。底本は「輓下」に作るが、意味の上からここは月を車輪に見立てて、それが「上」に登ってきたことを表現したものと理解して、一本に従い「輓上」に改めておく。○無

端はからずも。思いがけず。ここは月光の金と秋風の金とがはからずも重なって、ということだろう。李商隱「錦瑟」（『三体詩』卷二）に「錦瑟端無くも五十絃／一絃一柱華年を思う」。賈島「酬慈恩文郁上人」（『三体詩』卷二）に「聞説く又た南嶽を尋ねて去ると／端無くも詩思忽然として生ず」。○衣色 最明寺入道時頼の旅の衣の色。○金風 秋風のこと。晋の張協「雜詩」（『文選』卷二十九）に「金風 素節に扇し／丹霞 陰期を啓く」。李善注に「西方を秋と為し、而して金を主とす。故に秋風を金風と曰う」。ここは月が昇り秋風が吹いて、月の金色と秋風の金色で、旅の衣が文字通り金色に染まったということだろう。

遠山村から西に望む西明寺。遙か昔、最明寺入道時頼どのの投宿された秋。夕暮れ時に月が林の向こうから顔を出す。月の光も金色、秋の風も金色、時頼どのの旅の衣ははからずも金色に染まったことだろう。

【余説】西明寺のホームページに載せる寺の由緒書をそのまま引用しておく。

「（前略）慶長六年（一六〇一年）八月、家康から長井郡仕置きが決定し、この年末から家中の大移動が開始され、同時に多くの寺社も移転してきた。恵日山西明寺は越後から米沢の遠山村に移転してきたものという。

寺の由緒書によれば、「羽前国置賜郡遠山村恵日山西明寺は、慶長年中越後国より米沢に引き移りし寺也。」由来に曰く、「宗尊親王御治世執権職北条入道最明寺時頼殿、建長年間（一二四九～一二五五年）諸將の賢愚、士卒の剛胆を正に知らんと欲し、身を行脚にやつし諸国を巡歴す。下越後

に至り行き暮れて貧敷農家に一泊を乞う。亭主何某有徳の者にて、所縁もなき僧とはいえども、暮困難せん事を憐察し、懇ろに取り扱い貧しき中にも心を用いて厚く饗応しける。翌朝入道殿出立せんとし給う時、この家の女房安産す。亭主入道殿に請うて曰く、愚妻只今安産男子出生せり、是れ迄度々産すといえども、いかなる前業にや夭死して育ち難し。出生の子に名を賜るべしと只管に嘆願しけり。入道殿不憫に聞こし召し我が法名をとりて、西明寺と名付け給う。亭主大切に撫育しけるが安全に成長しけり。

その後、郡役にて彼の西明寺、鎌倉に登りける所、傍輩共、西明寺、西明寺と呼びける故、公役人不審に思いその謂れを問うに、出生の時の事件を詳らかに答えた。その旨台聴に及ぶ処、入道殿先年の厚情・仁慈、且つ出産の時に一泊せし因縁を思し召しだされ、有難くも其の者の年貢・郡役を免じ国元へ帰村致されたり。西明寺、この時始めて北条時頼殿なるを知り、御恩沢の厚きを奉戴し、農業を廃し出家となり、我家を寺に建立し、西明寺を寺号となし、恩恵の深きを以て恵日山と号し、三密瑜伽の法を修し、国家長久を朝暮祈念することなし。是れ恵日山西明寺の祖なりと云々。」

《20》雪夜囲爐

雪夜 炉を囲む

雪夜 囲爐情更長

雪夜 炉を囲んで 情更に長し

吟遊相会古今忘

吟遊相会して古今を忘る

江南良策無求処

江南の良策 求むる処無し

柴火煙中煨芋香

柴火煙中 芋を煨くの香り

▽七絶。下平声七陽韻（長・忘・香）

□底本 自筆短冊。米沢市林泉寺藏。『定本直江兼統』一七六頁に写真あり。
△木村徳衛云う、「この詩の短冊は、兼統の自筆であって、伊佐早謙寄贈、

米沢林泉寺宝物掛軸となつて居て、…何分長年月を経たこととて、墨色も褪せ、汚染もあるため、承句の忘を忌と読み解釈する人もあるが、七陽の韻を押し出したもの故、忘であること疑う余地なく、赤外線写真で見ても、忘の草字であることは明瞭である。」

●作詩年次未詳。恐らくは晩年の作。

○囲爐 炉端を囲む。陸游「宿村舎」に「土榻 爐を囲んで豆楷暖かに／荻簾戸に當つて布機鳴る」。同「風雨夜坐」に「松明影に対す 談玄の客／篠火爐を圍む 采葉の翁」。○情更長 心はさらに深まる。吳融「戲」に「恨み極りて海を填むるに同じく／情長くして江を導くに抵る」。宋・王安石「酬俞秀老」に「東庵を灑掃して一牀を置き／君に於いて独り覚ゆ 故情長きを」。○吟遊 許棠「題研湖二首」に「吟遊終に厭わず／還た曲江の頭に似たり」。○江南良策 宋の太祖趙匡胤と宰相の趙普の雪の夜の会話に基づく。『十八史略』卷六（『宋史』趙普傳）に云う、「上、位に即いてより或いは微行して功臣の家に幸す。測るべからず。趙普、朝より退く毎に敢て衣冠を脱せず。一夕大いに雪ふる。普意へらく、復た出じと。之を久しうして門を叩く声を聞く。異とすること甚だし。亟かに出れば則ち上、雪中に立てり。普、惶恐して迎拝す。普の堂に即きて重衾を設けて地坐す。炭を熾んにして肉を焼き、普の妻酒を行「すす」む。上、嫂を以て之を呼ぶ。普、從容として問いて曰く、夜久しく寒甚だし。陛下何を以てか出ると。上曰く、吾、睡り著する能わず。一榻の外、皆他人の家なり。故に來りて卿を見ると。普曰く、陛下、天下を少とするか。南征北伐、此れ其の時なり。願わくは成算を聞かんと。上曰く、吾、太原を取らんと欲すと。普、黙然たること良久しうして曰く、臣の知る所に非ざるなり。太原は西北の二辺に當れり。一挙して下らしめば、辺の患いは我独り之に當らん。何ぞ姑く留めて以て諸国を削平するを俟たざる。彼の彈丸黒子の地、將た何ぞ逃るる処あらんと。上笑いて曰く、吾が意、正に爾り。姑く卿を試みるのみと。是に於いて師を荊湖に用う。繼いで西川を取る。」「江南の良策」とは太原をしばらく措いて江南の荆・湖を先ず討つという趙普の策をいう。○柴火 陸游「雪夜」に「且く焼く 生柴の火／靜かに聴く 湿雪の声」。○煨

芋香 唐の明瓊禪師、号は懶殘の話に基づく。『高僧傳』に云う、「衡岳寺の僧明瓊禪師、性懶にして残を食らう。懶殘と号す。李泌これを異とし、往きて見る。正に火を撥し芋を煨きてこれを啖らう。其の半を取りて泌に授けて曰く、多言する勿れ、十年にして宰相を領取せん、と。」

雪の夜、ふたりしているりを囲めば、こころはいよいよ深くなるのを覚えます。お互いに詩などよみあって、古今のさまざまなことどももすべて忘れてしまう心地です。宋の太祖趙匡胤に対して、宰相の趙普が雪の夜に言上した江南の良策も、いまやわたしたちには無用のこと。それよりむしろいろりの火と煙の中で芋が焼けるいい匂いがするの、何もかも忘れて更けゆく雪の夜を味わいたいと思います。

【余説】この詩に関して、関ヶ原の合戦以後の兼統の感懐と絡めて、いくつかの読み方があるので紹介しておく。

渡辺三省氏『直江兼統とその時代』（昭和五十五年）。「この詩は時局に關連して感懐を述べたほとんど唯一のものである。これは関ヶ原戦後の彼の心境を語るものと考えられる。雪の夜深くあい許した詩友と二人で会して詩を語っていると、現在の時局などすべて忘れてしまい、情緒いよいよ深くなる思いである。自分の抱いていた回天の大策は用いられなかったのであるから、もうそのことは忘れてしまおう。そしてこの友と芋を焼いてその香りを楽しんでいなのだ、という意味のものであろう。江南の良策というのも、芋を焼くというのも、いちいち中国の故事に拠っているのであるが、「江南良策無求処」の七字には無限の思いが込められている。良策とは家康への抗戦そのものを指しているともみられるが、もっとつき詰めて、家康が下野の小山から退却したとき、これを追撃すべしとする兼統の建策を、景勝が退けたことを意味するとすれば、これはじつに容易ならぬ詩である。」（一九二頁）。

木村徳衛氏の『直江兼統伝』（昭和十九年初版、平成二十年新訂版）。「『雪夜囲爐』と題する兼統の作詩について、兼統と関ヶ原関係との説明を試みた人々もある。（中略）関ヶ原役後、本多正信及び土井利勝と結んで、

専ら幕府に奉承しておった兼統が、徳川氏の忌諱に触れる様な不謹慎の作詩を公にすべき筈なく、この転句は、全く宋史にある所の、太祖とその忠良の宰相趙普との、雪夜の間答を引用したものに相違ない。(中略)兼統は景勝を以て太祖に比し、自分は趙普を以て任じておったのであろう。即ち雪夜爐を囲んで吟遊相会すれば、情はさらに深く、古今も忘るる程の興趣が涌くものである、雪夜で思出したが、宋太祖が趙普の門を叩いたのは、あたかもこんな夜であつたらうと一転し、柴火煙中煨芋香と結んで、雪国の真の情緒を詠じたものである。この詩によつても、兼統が景勝の忠良の宰相であつたことが推察せられよう。」(新訂版二九八～二九九頁)。

《21》元午仲冬下澣、余一日寄駕於新築之禪林寺。此地有経堂之霊也、有神祠之英也、青松碧流、僉以山門之境致也。是日也、寒氣料峭、飛雪封條、恰如春樹着花而已。四隣觀覽之美、倍万千旧古者、実老禪卓錫之謂也。此時此興懷、不可擲。漫賦俚語一篇、以表他時異日花園転位之賀云爾。伏希改正。 鈎齋

元午仲冬下澣、余一日駕を新築の禪林寺に寄す。此地の経堂の霊有り、神祠の英有り、青松碧流、僉(み)な以て山門の境致なり。是の日や、寒氣料峭、飛雪條を封じて、恰も春樹の花を着けたるが如きのみ。四隣觀覽の美、旧古に倍すること万千なる者にして、実に老禪卓錫の謂なり。此の時此の興懷擲つべからず。漫りに俚語一篇を賦し、以て他時異日花園転位の賀を表すと爾か云う。伏して希わくは改め正せ。 鈎齋

○元午仲冬下澣 元和四年(一六一八)十一月下旬。 ○新築之禪林寺 元和四年(一六一八)冬、直江兼統が九山宗用を招き創建した米沢の禪林寺(現・法泉寺)。山号は恵日山、臨濟宗妙心寺派の禪寺。開基は上杉景勝、普請奉行は直江兼統。 ○料峭 風の寒いさま。陸龜蒙「京口」に「東風料峭として客帆遠く／落葉夕陽天際に明らかなり」。宋の蘇軾「陳州与文郎逸民飲別携手河堤上作此詩」に「春風料峭として羊角転じ／河水渺綿として瓜蔓流る」。陸游「晨起」に「倦枕廉纖の雨／幽窗料峭として寒し」。

○飛雪封條 雪が枝に凍りつく。宋の梅堯臣「次韻和冲卿元日」に「凍雲低く闕を覆い／残雪稍や條を封ず」。黄庭堅「招子高二十二韻兼簡常甫世弼」に「駕言して聊か帰を撰り／飛霜曉に條を封ず」。○他時異日花園転位之賀 「花園」は京都花園の妙心寺を指す。そこへ「他時異日」いつの日か、九山禪師が「転位」住持として移られる日の来ることを「賀」予祝するということ。

元和四年十一月下旬、私は一日、新築の禪林寺まで馬を進めました。この地は寺の経堂もあれば、白子大明神にも隣接し、緑の松と間を流れる掘立川の青く澄んだ水と、すべてがこの寺の美しい趣を成しております。この日は寒氣料峭として冷たく、舞い散る雪が松の枝に凍りついて、あたかも春の樹々に花が咲いたかのようです。寺の周囲の眺めのすばらしさは、以前に比べて千倍万倍の趣きです。それもこれもまことに禪師がここに錫杖を立てられたおかげに他なりません。この日の興懷はそのままにしておくわけに参りません。そこで憚りながら漫りにつまらぬ詩一篇を賦して、いつの日か禪師が京都花園の妙心寺に移られる日の予祝としたいと思つた次第です。伏して願わくはご訂正ください。 鈎齋

卓錫神祠霊地隣

卓錫す 神祠霊地の隣

講筵平日絶羃塵

講筵 平日 羃塵を絶す

禪林寺裏枝枝雪

禪林寺裏 枝枝の雪

認作洛西花園春

認め作す 洛西花園の春と

▽七絶。上平声十一真韻(隣・塵・春)

□底本 法泉寺(旧禪林寺)境内兼統詩碑。遠藤綺一郎『直江兼統伝』二一七頁、及び『定本直江兼統』一九三頁に写真あり。

○法泉寺(旧禪林寺)文殊堂境内に兼統と九山禪師の詩碑が建っている(昭

和三十五年建立)。そこにはこの詩の題が「禪林偶成」となっている。

●元和四年(一六一八)十一月下旬。五十九歳。

○卓錫 錫杖を立てること。遊行の僧が留まること。ここは九山禪師がこの禪林寺に住するようになったことをいう。蘇軾「卓錫泉銘」に「六祖初めて曹溪に住するや、錫を卓〔た〕てて泉涌く。清涼にして滑かに甘く、大衆を贍足す。今に逮ぶまで数百年。」○神祠 白子大明神(現、白子神社。山形県米沢市城北二丁目三二五)。禪林寺とは掘立川を隔てて東隣に位置する。文祿年間に蒲生氏郷により米沢城鎮守とされ、その後米沢城主となった上杉景勝や直江兼統によって引き続き米沢城鎮守として崇敬された。○講筵 講義が行われる場所。徐氏「三雪山夜看聖燈」に「猿は来たる齋石の上／僧は集う講筵の中」。劉禹錫「海門潮別浩初師」に「前日蕭寺に過り／師の講筵に上るを見る」。九山禪師がこの禪林寺で藩士の子弟の教育を始めたことを指す。○囂塵 さわがしくけがれた俗世間。謝朓「之宣城出新林浦向版橋」(『文選』卷二十七)に「囂塵 茲より隔たり／賞心 此に於て遇う」。嵇康「与山巨源絶交書」(『文選』卷四十三)に「囂塵 臭処、千変百伎、人の目前に在り、六の堪えざるなり」。○枝枝 えだえだ。竇群「假日尋花」に「枝枝雪の如し南関の外／一日休閒 尽く花に属す」。杜甫「柳辺」に「枝枝総て地に到り／葉葉自ら春に開く」。○認作 「見做す」という意味の口語的表現。白居易「送兗州崔大夫駙馬赴鎮」に「戚裏は誇りて賢駙馬と為し／儒家は認めて好詩人と作〔な〕す」。○洛西花園 京都花園の妙心寺(京都市右京区花園妙心寺町)を指す。禪林寺の松の枝に凍りついた雪を、京都花園の妙心寺の花が咲いたようだと考えるのは、禪林寺での九山禪師の教育指導が本場京都の妙心寺並みだという喜びを述べたものと考えられよう。同時にこれは序文に「他時異日花園転位の賀を表す」という通り、九山禪師がいつの日か妙心寺の住持として花園に行かれることを予祝する気持ちも込めていよう。

米沢城鎮守の白子大明神に隣接するこの禪林寺に、九山禪師が錫杖を立てられ、住持としてお勤めになられるようになって以来、おかげさまで

騒がしい俗世間から離れて、藩士の子弟へ向けた講筵が毎日開かれるようになりました。今日は折からの雪がこの禪林寺の境内の松の枝々に凍りついて、まるで春の花が咲いたようです。(それはあたかもこの禪林寺に学問の花が咲いたようではありませんか。更にまたいつの日か)京の西、妙心寺に春が訪れたら、きつとこんな風に美しく咲くだろうと、まことにめでたく思われます。

【余説】兼統詩碑の向かいに九山禪師詩碑が建っている。「開祖九山禪師詩碑洗心詩偈」として次の詩偈が記されている。

妙香池畔碧苔深	妙香池畔 碧苔深し
只聽松風般若音	只だ聴く 松風般若の音
誰識苑中禪寂好	誰か識らん 苑中禪寂の好きを
都来忘却世塵心	都来〔すべて〕忘却す 世塵の心

《22》瀧水乱糸

瀧水 糸を乱す

瀑水乱糸映夕陽	瀑水 糸を乱して 夕陽に映がす
---------	-----------------

光陰難繫更愁腸	光陰 繫ぎ難く 更に愁腸
---------	--------------

清風吹落盧山上	清風吹き落す 盧(廬)山の上
---------	----------------

引入漢宮一線長	引いて漢宮に入りて 一線長し
---------	----------------

▽七絶。下平声七陽韻(陽・腸・長)。

□底本 遠藤本に拠る。木村本、渡辺本同じ。

△「廬山」は「廬山」の誤り。

●作詩年次未詳。木村徳衛云う、「米沢市有壁一雄所蔵」。

○瀧水 滝の水、滝の流れ。戴叔倫「下鼻亭瀧行八十裏聊状艱險寄青苗鄭

副端朔陽」に「瀧水 天際より来り／鼻山 地中に坼く」。○乱糸 糸のよ
うに乱れる。劉廷芝「代悲白頭翁」に「宛転たる蛾眉 能く幾時ぞ／須臾に
して鶴髮 乱れて糸の如し」。○瀑水 滝の水、滝の流れ。宋之問「巫山高」
に「古槎 天外より落ち／瀑水 日辺より来る」。張九齡「奉和吏部崔尚書雨
後大明朝堂望南山」に「奔峰 嶺外に出で／瀑水 雲辺より落つ」。○映夕
陽 曹鄴「送進士下第歸南海」に「数片の紅霞 夕陽に映じ／君が衣袂を攬
りて更に觴を移す」。○光陰 としつき。時間。梁の江淹「別賦」(『古文真
選』卷十六)に「明月白露／光陰往来」。李白「春夜宴桃李園序」(『古文真
宝後集』卷三)に「夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり」。
○難繫 つなぎ留めることが困難である。○愁腸 愁い悲しむ心。唐彦
謙「韋曲」(『三体詩』卷一)に「愁腸を写さんと欲して不才を愧ず／多情
を連漉して已に低摧す」。崔魯「春日長安即事」(『三体詩』卷二)に「玉樓
春暖かなり笙歌の夜／肯て信ぜんや 愁腸の日に九回するを」。○清風
清らかな風。『詩經』大雅・烝民に「吉甫 誦を作る／穆として清風の如し」。
蘇軾「送門冬飲」(『聯珠詩格』卷十三)に「一枕の清風 直い万錢／人の肯
て北窓の眠りを買う無し」。黃庭堅「鄂渚南樓」に「清風明月 人の管する
無し／併せ作す南樓一夜の涼」。○吹落 ここは(清風が滝水を廬山の
上から)吹き落す。薛能「老圃堂」(『三体詩』卷一)に「昨日春風 不在を
欺き／床に就いて吹き落す 読残の書」。○廬山 江西省九江県の南にあ
る名山。香炉峰や廬山の瀑布で有名。李白「望廬山瀑布」に「日は香炉を
照らして紫烟を生ず／遙かに見る瀑布の長川を挂くるを／飛流直下三千
尺／疑うらくは是れ銀河の九天より落つるか」と。○漢宮 漢の宮殿。
韓翃「同題仙遊觀」に「山色遙かに連なる 秦樹の色／砧声近く報ず 漢宮の
秋」。ここで漢宮が出てくるのは次の宋の方岳の「冬至」の詩に拠る。○
一線長 滝が一直線に長く落ちる様子を言ったもの。ただしこの表現は宋
の方岳の「冬至」(『聯珠詩格』卷六)に「至日 詩を觀て 幾行ならず／梅
梢横月又た昏黃／漢宮の紅影 人の見る無し／未だ必ずしも能く一線の長
さを添えず」とあるのに拠ったものと思われる。「引いて漢宮に入りて一
線長し」と「漢宮」という言葉が唐突に出てくるところからも、それは想
像される。方岳の詩にいう「一線長し」とは、『荊楚歲時記』に「晋魏の間、

宮中 紅線を以て日影を量る。冬至の後、日は長さ一線を添う」、すなわち
わずかず日足が長くなることを言ったもので、滝の表現とはつながらな
い。ここはその表現を転用して、滝の一直線に長く落ちる様子を表現する
のに使ったものと見られる。

滝の水が糸を乱したように白く飛び散り、そこに夕日が射してきらき
ら光っている。絶えず落ちるその滝を見てみると、時間が絶え間なく流れ
去る感じがして、それを止めるすべもなく、心は沈んでくる。李白は廬山
の瀑布を描いて「飛流直下三千尺／疑うらくは是れ銀河の九天より落つる
か」と言ったが、その廬山の上から清らかな風が吹き落した水が、一直
線の滝となって長く落ちて、漢の宮殿にまで届くのだ。

《23》〔欠題〕

〔題を欠く〕

雲隙水輪漏半規

雲隙うんげきの水輪じゆうりん 半規はんきを漏らす

清光猶未并盈虧

清光せいこう 猶な未いま并あ盈虧えいきを并べんぜず

憑誰問取画工去

誰たれに憑よりてか画工がこうに問取もんしゆし去さらん

欲墮時耶欲上時

墮おちんと欲ほつする時耶ときか 上のほらんと欲ほつする時ときか

▽七絶。上平声四支韻(規・虧・時)。

□底本 花ヶ崎盛明編『直江兼統のすべて(新装版)』(二〇〇八年、新人
物往来社)所収の中澤肇「文化人としての兼統」一四三頁に「兼統の漢詩」
として書幅の写真あり。兼統自筆と見られる。書の左隅に写真ではよ
く読み取れないが、細字で「直江山城守七絶書」と別の手で記されてい
るように読める。所蔵者は記されていない。この詩、他書には見えず。
△転句「憑誰」を中澤氏は「焉誰」と読んでおられるが、写真で見ると「憑誰」
である。

●作詩年次未詳。転句の表現から雲間の月を描いた画に題した題画詩であったと思われる。

○雲隙 雲間の隙間。 ○氷輪 月の異称。蘇軾「宿九仙山」に「夜半老僧客を呼んで起こす／雪峰缺くる処 氷輪湧く」。 ○半規 半円。規はコンパス。謝靈運「遊南亭」(『文選』卷二十二)に「密林 餘清を含み／遠峯半規を隠す」。黄庭堅「次韻奉送公定」に「屯雲 六幕(＝天地四方)を塞き／新月半規を吐く」。 ○清光 月の清らかな光。江淹「望荆山」(『文選』卷二十七)に「寒郊 留影無く／秋日 清光懸る」。沈約「応王中丞思遠詠月」(『文選』卷三十)に「洞房 殊に未だ暁けず／清光 信に悠なる哉」。白居易「八月十五日夜禁中直对月憶元九」に「猶お恐る清光同じく見ざるを／江陵は卑湿にして秋陰足(＝お)し」。 ○盈虧 月の満ち欠け。白居易「代書詩一百韻寄微之」に「素書三たび往復し／明月七たび盈虧す」。 ○憑誰 だれに頼んで。杜甫「自京竄至鳳翔喜逢行在所」其三に「死し去らば誰に憑りてか報ぜん／帰り来りて始めて自ら憐れむ」。 ○問取 去「問取」はたずねる。黄庭堅「清平樂(春婦何処)」に「春は蹤跡無し 誰か知らん／黄鸝に問取するに除非(＝あら)ざるよりは」。「去」は上の動詞に付いて「〜に向って」という趨向・方向性を与える役割を果たす添え字。

雲間から月が半分漏れている。この清らかな月の光は満ち欠けの具合が雲に遮られてよくわからない。この画を描いた画家に尋ねてみたいと思うが、だれを通じて聞いたものか。これは月が沈もうとする時なのか。上ろうとする時なのか。

《24》〔欠題〕

〔題を欠く〕

春雁似吾吾似雁

春雁は吾に似て 吾は雁に似たり

洛陽城裏背花婦

洛陽城裏 花に背いて帰る

▽七言二句。聯句の一部か。

□底本 遠藤本に拠る。

●作詩年次未詳。京都。

○春雁 春の(北へ帰る)かり。常建「鄂渚招王昌齡張慎」に「春雁又た北飛し／音書固より聞き難し」。白居易「雜興」に「東風二月の天／春雁正に離離」。 ○洛陽城裏 「洛陽」は日本の京都の雅称。唐の都洛陽になぞらえていう。「城裏」は街中。ここは京の街中の意。張籍「秋思」(『三體詩』卷二)に「洛陽城裏 秋風を見る」。 ○背花 花に背く。徐凝「長慶春」(『三體詩』卷一)に「身上の五勞仍お酒に病み／天桃窓下 花に背いて眠る」。

北へ帰る春の雁は私のようで、私は雁に似ている。春の花咲く京の街を花に背いて北へ帰るのだ。

【余説】京都における年次不明の漢和聯句の会の記録(上杉家文書。「包紙ウハ書」に云う、「京都二テ、直江山城守、相国寺兌長老を招、漢和興行之懐紙写」)に次のような句が見える。

ほのかにかへる雁の一行

長(成田氏長)

塵裡負春客(塵裡春に負へそむ)く客

統(直江兼統)

また別の記録(相国寺の日記『鹿苑日録』天正一九年(一五九一)三月七日)には、兼統が京都において細川幽斎と聯句を楽しんだという記述があり、自幽斎発句現来、句曰、花の後帰るを雁の心哉、脇遣于越州直江公焉、云々とある。この記録では脇句を兼統がどうつけたかは記されていない。

木村徳衛氏は『直江兼統伝』一七八頁において、「この幽斎の発句は、予め兼統の作詩として最も有名である上二句の欠けて居る所の、「春雁似吾吾似雁。洛陽城裏背花婦」を知って発句したものか。あるいはこの句の着想によって兼統の詩作となったか。そのいずれが前後なるかは不明であるが、互いに関連する所あるものと思われる。」と記しておられる。

確かにこれらの記録に見える「帰る雁」のモチーフが、兼統の「春雁似吾吾似雁／洛陽城裏背花婦」の両句と密接な関係にあることは誰の目にも明らか

かである。

しかしこれらの前後関係を云々する前に、これらの詩句に共通する古歌があることを忘れてはなるまい。『古今和歌集』に載せる伊勢の「帰雁をよめる」と詞書のある歌、「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」である。春霞が立つのを見捨てて北へ帰って行く雁は、花のない里に住みながらいたのであるか。聯句に参加する人々のところに共通して、当然この歌があった。だからこの歌に重ねて兼統の「春雁似吾吾似雁／洛陽城裏背花帰」の両句を読んでも、伊勢の歌がみやこびとの視点から雁を眺めているのに対して、兼統の句は「春雁は吾に似て吾は雁に似たり」と「花なき里」に住みなれた雁に自らを重ねて、繁華のちまた京を離れて「花なき里」の米沢に帰ろうと分かっていることが分かる。つまり雁の方に自らの視点を転換して、伊勢の歌を詠みかえて見せたのである。兼統は洛中の作と想像される作詩年次不明の作「花を売る」(↓《13》)で、贅沢なみやこびとの様子を批判的に描いていた。兼統が「洛陽城裏 花に背いて帰る」と詠んだ背景にいろいろな事情があったのかは詳らかでないが、華やかな京よりは「花なき里」に落ち着きを感じる心の動きがあつて、この両句が生まれたのだらうと想像される。

ところで諸家はこの「春雁似吾吾似雁／洛陽城裏背花帰」の両句を、七絶の起句・承句を欠失した残りの句と見ている(遠藤綺一郎等『直江兼統伝』、野村研三『直江兼統の漢詩 花に背いて帰る』等)。なぜ転句・結句と見るかといえば、これがもし七絶の起句・承句ならば句末の両字とも押韻するはずだが、そうなっていないからである。

しかしこの両句の成立がもし私の想像したような経過であつたとすれば、これはすでにこれだけで完成した世界であつて、絶句の欠失したものという考えは取りにくいというのが、私の理解である。あるいはこの後、兼統自身が起句・承句を作つて絶句として完成させたが、それがまた失われて、この二句だけ残つたという可能性もないとはいえないが、かなり無理な想像である。

ここはむしろ兼統がこの「春雁似吾吾似雁／洛陽城裏背花帰」の両句を作るプロセスとして、伝統的な和歌の世界がベースにあつて、それを踏まえて

独自に作り変え、自らの心を語って見せた例として、理解しておきたいと思う。

なお他に兼統が参加した「漢和聯句」「和漢聯句」の記録がいくつか残っており、その中に兼統の五言の漢詩句が二十句ほど残っている。それだけ抜き出しても意味はないが、参考までにここに抜き出してみる。なお兼統の聯句については、木村徳衛『直江兼統伝』一七四頁～一八八頁、及び渡辺三省『直江兼統とその時代』二〇〇頁～二〇七頁に詳しい。

(一)天正十七年九月二十九日、景勝一座漢和聯句会より(木村徳衛『直江兼統伝』一七六頁)

・報春鶯語緩 春を報じて鶯語緩やかなり
 ・鰥閨暗結愁 鰥閨暗に愁いを結ぶ
 ・友依期月会 友は期月に依りて会す

(二)年次未詳 在洛中里村紹巴郎和漢聯句会より(同上 一七九頁)

・露涼滿晚籬 露涼しく晚籬に満つ
 ・烟微村市散 烟微かにして村市散ず
 ・盃迎間社宜 盃迎えて間社宜し

・不肯籠山耳 籠に背かざるは山のみ?

・欄晴素月移 欄晴れて素月移る

(三)年次未詳 在洛中相国寺承兌等を招いた漢和聯句会より(同上 一八二頁)

・捲簾好賞商 簾を捲きて商(「秋」)を賞するに好し
 ・鷗辺無黜陟 鷗辺 黜陟無し
 ・山彰金仏相 山は彰す 金仏の相
 ・童眠りて書は擲つが儘なり
 ・童眠りて書は擲つが儘なり
 ・溪流飛羽觴 溪流 羽觴を飛ばす
 ・塵裡負春客 塵裡 春に負く客
 ・霞融けて詩債を償う
 ・霞融けて 詩債を償う
 ・今古力擒強 今古力 強を擒にす
 ・吟履為花緩 吟履 花の為に緩し
 ・露於蘭草芳 露は蘭草に於て芳し

(四)慶長六年十月四日漢和聯句会より(同上 一八七頁)

・落葉雨天下 落葉 雨天の下

(五)慶長六年十二月十五日米沢直江邸和漢聯句会より(同上 一八八頁)

・吟春臘底梅 春を吟ず 臘底の梅

【付記】兼統漢詩とされているが実は他人の作品

穉思

穉思

雨勻紫菊叢叢色

雨は紫菊を勻す 叢叢の色

風弄紅蕉葉葉聲

風は紅蕉を弄す 葉葉の聲

北畔是山南畔海

北畔は是れ山 南畔は海

祇堪图画不堪行

祇だ图画するに堪え 行くに堪えず

▽七絶。下平声八庚韻(声・行)。起句は踏落し。「色」は入声十三職韻。

□米沢市上杉博物館蔵自筆書幅(一六・八×一五・二cm)。箱書に「直江山城守秋思詩」とあり。『図説 直江兼統人と時代』(二〇一〇年、米沢上杉

文化振興財団)一六四頁。

●唐の杜荀鶴の「閩中秋思」の詩(『聯珠詩格』卷一)。

NAOE Kanetsugu (直江兼続) 's Chinese Poetry (漢詩)
～ Text, commentary and translation ～

SHIMAMORI Tetsuo

要 旨

戦国武将、直江兼続は漢詩を二十三首残している。本稿はその校訂、注釈、現代語訳である。これらの注釈作業を通じて、我々は直江兼続の中国文学に関する深い造詣と、日本の王朝文学の流れを汲む伝統的な花鳥風月の美意識、そして漢詩を通じての交友関係の跡を知ることができる。

Key words : NAOE Kanetsugu (直江兼続)
Chinese Poetry (漢詩)
Commentary (注釈)
Poetry in Tang-Song dynasty (唐宋詩)

(平成28年9月30日受理)